

岩手県文化財調査報告書第34集

東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書

— II —

昭和 54 年 3 月

岩手県教育委員会
日本国有鉄道盛岡工事局

東北新幹線関係埋蔵文化財調査報告書

— II —

序

本県には、はるか数万年前から人間の営みがあり、その後たゆまぬ先人の努力と叡智によりすぐれた郷土の文化が現代の生活に受けつがれています。その先人の文化遺産を保存、保護し活用すると共に未来へと伝えることが私たちの責務でもあります。

全国新幹線鉄道整備法にもとづき遺跡の豊庫といわれる北上川流域を縦貫する東北新幹線建設工事実施計画が昭和46年10月に認可されました。

これに関連し、失われようとする埋蔵文化財の取り扱いについて慎重な配慮のもとに、可能な限り保存するための協議がおこなわれましたが、最終的には48遺跡について記録保存を前提とした発掘調査を実施することとなり、文化庁と日本国有鉄道との覚え書にもとづき、日本国有鉄道盛岡工事局からの委託事業として岩手県教育委員会が調査主体となり、昭和47年10月から昭和52年12月まで5年3ヶ月にわたる発掘調査を実施してまいりました。

この調査により宮城県境より盛岡市に至る地域の原始・古代から近世における歴史を解明する貴重な資料の数々を得ることができました。

本報告書は調査した48遺跡のうち北上市、花巻市、石鳥谷町に関係した11遺跡について第2分冊として刊行するのはこびとなったものでありますが、いささかでも埋蔵文化財の活用と学術研究のために役立つことができれば幸いです。

最後にこの調査について長期間にわたりいろいろ御援助、御協力いただいた地元教育委員会をはじめ関係各位に対し心から感謝申し上げます。

昭和54年 3月

岩手県教育委員会

教育長 畑山 新信

例 言

1. 本書は東北新幹線関係遺跡発掘調査報告書7分冊の中の第2分冊として、昭和49年度から昭和51年度に発掘調査を実施した北上市、花巻市それに石鳥谷町所在の11遺跡について作成したものである。

2. 遺跡の記載は南（北上市）から順に編集した。

3. 本書収録遺跡の発掘調査、および調査資料において次の方々からご指導、ご助言を賜わった。（敬称略）

岩手大学名誉教授 板橋 源

岩手大学教授 草間俊一

北海道大学助教授 林 謙作

岩手県文化財審議会委員 司東真雄

4. 本書における資料の鑑定、分析などについては、次の方々と機関からご教示、ご協力を賜わった。（敬称略）

・石材鑑定

岩手県立杜陵高等学校教諭 佐藤二郎

・炭化材樹種鑑定

岩手大学農学部助教授 吉田栄一

・種子鑑定

東北林業試験場東北支場研究所顧問 村井三郎

・遺構埋土堆積物（火山灰）の定量分析及びX線回折

岩手県工業試験場

5. 本書に掲載した地形図、空中写真は、建設省国土地理院発行の5万分の1地形図、20万分の1地勢図、および2万分の1空中写真を使用したものである。

6. グリッド配置図は、日本国有鉄道作成による500分の1地形図を使用した。

7. 土質柱状図は、日本国有鉄道所有のボーリング資料等を参考にした。

8. 本書の観察表、図版は、次の要項に従って作成されている。

(1)、遺跡における層相と遺物の色調観察は、小山、竹原編著『新版・標準土色帖』日本色研事業㈱を使用した。

(2)、遺構・遺物の実測図は、原則として統一した縮尺になるよう努めた。

9. 方向は、新平面直角座標第X系（東北）による座標北を矢印で示してある

$$\text{原点} \begin{pmatrix} \text{経度} & 140^{\circ} 50' 00'' 000 \\ \text{緯度} & 40^{\circ} 00' 00'' 000 \end{pmatrix}$$

各遺跡の基準線と座標北との方向角は別表（第I表）のとおりである。

10. 遺物・写真・実測図等の資料は、岩手県教育委員会文化課において保管している。

11. 調査主体者

岩手県教育委員会・日本国有鉄道盛岡工事局

12. 調査担当者

岩手県教育委員会事務局文化課

〔昭和53年度〕

文化課長 菅原一郎

課長補佐 小野寺昭吾、同 小野寺 登

庶務係長 加藤勝男

主事 鈴木喜代治、同 佐藤伸一郎

(埋蔵文化財班)

主任文化財主査 嶋 千秋

文化財主査 菊地郁雄

技 師 国生 尚

○新幹線調査班

文化財主査 菅原弘太郎 同 細谷英男 同 朴沢正耕

社会教育主事補 鈴木隆英

技 師 佐々木勝

13. 本書の執筆のまとめは次のとおりである。

- ・調査に至る経過……………嶋 千秋
- ・調査の方法、整理の方法等……………朴沢正耕
- ・八木畑遺跡、幅遺跡……………朴沢正耕
- ・松ノ木遺跡・野田Ⅰ遺跡、野田Ⅱ遺跡
堀ノ内遺跡、八幡遺跡……………菅原弘太郎
- ・西野遺跡……………細谷英男
- ・高松遺跡、大明神遺跡……………鈴木隆英
- ・大曲遺跡……………佐々木勝

なお遺物、図面の整理、実測、および写真の撮影などは次の者があたった。

(期限付臨時職員)

坂川 進 齊藤 孝 鈴木優子 古沢友治 佐藤正彦 熊谷由美子

浅利孝子 伊東由美子 小林史子 村上良子 下村奈々子 屋和田恵子

小林三千江 平野邦子

14. 各遺跡の執筆にあたっては、つとめて文中の記述の統一に心がけたが、十分な検討を欠いた向きもある。

目 次

序文

1. 調査の経過…………… (1)
2. 調査の方法…………… (4)
3. 整理の方法…………… (5)
4. 広報活動の実施…………… (6)
 東北新幹線関係遺跡一覧
 東北新幹線関係遺跡位置図

本文

北上地区（南部）概観

1. 北上地区（南部）の地形環境…………… (11)
2. 周辺の遺跡…………… (11)

八木畑遺跡

1. 遺跡の位置と環境…………… (17)
2. 調査の方法と経過…………… (17)
3. 調査の結果…………… (17)
4. まとめ…………… (22)

松ノ木遺跡

1. 遺跡の位置と環境…………… (27)
2. 調査の方法と経過…………… (27)
3. 調査の結果…………… (27)
4. まとめ…………… (31)

西野遺跡

1. 遺跡の位置と環境…………… (35)
2. 調査の方法と経過…………… (35)
3. 調査の結果…………… (37)

4. 考 察…………… (71)
5. まとめ…………… (75)

北上地区（北部）概観

1. 北上地区（北部）の地形環境…………… (79)
2. 周辺の遺跡…………… (79)

野田 I 遺跡

1. 遺跡の位置と環境…………… (85)
2. 調査の方法と経過…………… (85)
3. 調査の結果…………… (85)
4. まとめ…………… (89)

野田 II 遺跡

1. 遺跡の位置と環境…………… (93)
2. 調査の方法と経過…………… (93)
3. 調査の結果…………… (93)
4. 考察とまとめ…………… (99)

堀ノ内遺跡

1. 遺跡の位置と環境……………(103)
2. 調査の方法と経過……………(103)
3. 調査の結果……………(103)
4. 考察とまとめ……………(124)

花巻地区概観

1. 花巻地区の地形環境……………(133)
2. 周辺の遺跡……………(133)

高松遺跡

1. 遺跡の立地……………(139)
2. 調査の方法と経過……………(139)

3. 調査の結果……………(140)
4. まとめ……………(160)

八幡遺跡

1. 遺跡の位置と環境……………(167)
2. 調査の方法と経過……………(167)
3. 調査の結果……………(167)
4. 考察とまとめ……………(186)

石鳥谷地区概観

1. 石鳥谷地区の地形環境……………(189)
2. 周辺の遺跡……………(192)

大明神遺跡

1. 遺跡の位置と立地……………(195)
2. 調査の方法と経過……………(195)
3. 調査の結果……………(196)
4. まとめ……………(225)

大曲遺跡

1. 遺跡の位置と立地……………(231)
2. 調査の経過……………(231)
3. 調査の結果……………(233)
4. まとめ……………(259)

幅遺跡

1. 遺跡の位置と環境……………(263)
2. 調査の方法と経過……………(263)
3. 調査の結果……………(263)
4. まとめ……………(264)

写真図版

北上、花巻、石鳥谷地区空中写真	(265)
八木畑遺跡	(271)
松ノ木遺跡	(275)
西野遺跡	(277)
野田Ⅰ遺跡	(291)
野田Ⅱ遺跡	(293)
堀ノ内遺跡	(295)
高松遺跡	(301)
八幡遺跡	(309)
大明神遺跡	(315)
大曲遺跡	(325)
幅遺跡	(337)
・発掘調査担当者および協力機関	(339)
・発掘調査地元作業員名簿	(339)
・整理作業員名簿	(342)

序 文

1. 調査の経過

昭和46年から実施された岩手県内東北新幹線建設工事に関係する埋蔵文化財発掘調査は一関市より盛岡市に至る約 101kmの間がその対象であり、発掘調査実施前の協議・分布調査の段階から発掘調査実施、調査結果の報告書刊行まで約9年の歳月を要した。ここでは、1. 発掘調査実施前の経過、2. 年度別発掘調査の経過、3. 整理・報告書作成の経過に大別しその概要についてまとめたい。

(1) 発掘調査実施前の経過

全国新幹線鉄道整備法（昭和45年5月18日法律第71号）に基づく東北新幹線建設予定地内における県内埋蔵文化財の取扱いについての最初の協議は昭和46年5月17日に日本国有鉄道盛岡工務局と岩手県教育委員会との間で行なわれ、運輸大臣に提出する申請書に添付する文化財資料は遺跡台帖により作成することとし、今後県教育委員会は分布調査実施のための準備と、建設工事に関連ある範囲内での遺跡についての情報を提出することとした。昭和46年11月2日、新幹線建設予定地内の分布調査実施のための協議をもち調査員は県教育委員会が関係市町村教育委員会の協力のもとに、県文化財専門委員、考古学専攻者、発掘調査経験者の中から委嘱をし市町村単位ごとに班の構成をした。遺跡分布調査は宮城県境より盛岡市に至る約 101kmを巾 2 kmの範囲で実施することとし、11月20日より約 2ヶ月の期間で終了した。その結果93遺跡が確認された。

昭和47年4月に主管課である社会教育課に4名の埋蔵文化財担当職員を文化財主査として配置し、さらに4名の嘱託補助員を採用した。東北新幹線担当職員として嶋文化財主査が当り他は東北縦貫自動車道関係の業務を担当しそれぞれの業務の遂行に当たった。更に同年6月1日より10日までの間、新幹線ルート用地杭の設置時期に合わせセンター杭を中心に20m巾に含む遺跡範囲確認のための現地調査を嶋・菊地文化財主査によって行ない、その結果43遺跡を発掘調査対象遺跡として決定した。その後、新幹線関連事業として東北本線北上貨物操作場の建設予定地と用地問題で現地踏査ができずにいた花巻地区の分布調査の追加により最終的に48遺跡が発掘調査対象の遺跡となった。その結果に基づき調査行程、方法等について協議を進め、全遺跡が記録保存を前提としての発掘調査を実施することにした。

(2) 発掘調査の経過

当初、東北新幹線開業は昭和51年度であり49年度中に発掘調査を終了しなければ支障がある

ということが調査計画立案にあたっての最大の悩みでもあった。そのため野外の発掘調査を優先先行させ、調査結果の整理、報告書の作成、刊行は別途に考えることとした。そのことから冬期間に入っても発掘調査を継続せざる得ないこともあり、調査の精度や報告書作成の面からも反省すべき点が多々あった。調査開始後の経過の中で国内経済に大きな影響を与えた総需要抑制政策等が原因となって、東北新幹線開業時期が延期となり発掘調査期間は昭和47年10月から52年10月までとなった。調査結果の整理と報告書作成作業は53・54年度の2ケ年で実施することとした。なお、埋蔵文化財発掘調査委託の契約は年度ごとに日本国有鉄道盛岡工務局長と岩手県知事との間で締結された。調査主体者は岩手県教育委員会教育長、調査主管課は岩手県教育委員会事務局文化課である。

次に年度ごとの主な発掘調査経過について略記する。

昭和47年度 調査員3名、補助員1名、調査期間10月25日～12月18日 3遺跡。

矢巾町所在の下赤林Ⅰ遺跡、下赤林Ⅲ遺跡、高畑遺跡を調査した。この調査は用地未買収地の調査であり国鉄が地権者より発掘承諾書を得ての調査であった。

昭和48年度 調査員8名、補助員5名、調査期間5月1日～1月29日 8遺跡。

4月、文化課の新設と共に埋蔵文化財調査班が誕生し、本格的な発掘調査が開始された。しかし、用地買収の関係などから年間スケジュールが確定しないまま、まず北上貨物操作場関連遺跡の南館遺跡よりスタートした。ここでは発掘調査方法の統一化を計るため新幹線班全員による合同研修調査を実施した。そして7月より1遺跡2名の調査員と1名の補助員を最低の班構成員とし、遺跡規模によって構成員を調整することとして8遺跡の調査を実施した。夏休み期間には発掘調査の経験のある教員、岩手大学生、京都女子大生の協力参加を得た。12月に入って杉の上Ⅱ遺跡において平安時代の焼失竪穴住居跡から多量の炭化材の発見があり、降雪と炭化材の処理上やむを得ずビニールハウスの設置の中で1月下旬まで冬期間の調査となった。

昭和49年度 調査員8名、補助員5名、調査期間4月8日～12月20日 17遺跡。

江刺市と稗貫郡石鳥谷町所在の遺跡が主な調査地域となった。江刺市落合Ⅱ遺跡は分布調査による遺跡範囲は北上川流域に広がる河岸低地における水田面より約1m高い微高地一帯としていたが、水田面における新幹線高架橋建設工事中に多量の遺物が発見され、地元教育委員会からの連絡があり、そのため遺跡範囲を広げ調査した結果、水田面下旧河道の泥炭層から平安時代の豊富な遺物資料の発見となり貴重な遺跡となった。江刺地区の調査は北上川東岸一帯であり各遺跡は蛇行しながら南下する北上川とその支流である広瀬川、人首川、伊手川の氾濫により度々冠水をうけていることから遺構の検出、精査の際に土層判別と遺構範囲の確認に手間どり多くの時間を費やした。

昭和50年度 調査員8名、補助員7名、調査期間4月10日～2月21日 15遺跡。

調査地区が、一関市・江刺市・北上市・花巻市・紫波郡紫波町・都南村・盛岡市と広範囲となり調査班相互の連絡、調整が困難な年であった。7月に北上市鬼柳町町分の新幹線建設予定地内にあったイチョウの大木の根元から一字一石経を地元民である佐藤忠二・佐藤丑蔵氏が発見されたことから鬼柳西裏遺跡としての取り扱いをすることとした。調査の結果、縄文時代・平安時代・近世の各時期にわたる複合遺跡となり2年継続の調査となった。また江刺市宮地遺跡は奈良時代から平安時代にかけての大集落跡となり調査中に2基の井戸が発見され、そのため乾水期である冬期間の調査となった。厳寒の中で2月末までの調査となり遺構実測図の完成と井戸枠のとり上げを行なった。紫波町西田遺跡は北上山地における小丘陵の西端にあり蛇行する北上川によって切離された台地に立地し滝名川と北上川低地に囲まれた残丘上にある。標高100m前後で周辺の水田面との比高は約10mである。この丘陵のほぼ中央を南北に縦断する新幹線予定地を調査対象としたが、ほとんどが山林であり遺跡としての確証はなかなかつかめなかった。立地形に調査根拠をもったこともあって、まず本年度は遺構検出のための調査を目的としたグリッド方式と重機使用（バックホー）による表土はぎを行なった。その結果、縄文時代早期・中期、平安時代にわたる大遺跡であることが確認された。

なお、年度シ、事異動で48年度より調査を担当した蜂谷艸平氏が陸前高田市立高田小学校へ転勤された。

昭和51年度 調査員7名、補助員8名、調査期間4月9日～12月23日 9遺跡。

昨年度よりの調査継続である江刺市宮地遺跡・北上市鬼柳西裏遺跡、紫波町西田遺跡と盛岡市所在の4遺跡が調査の中心であり本年度で48全遺跡について調査が及んだことになった。西田遺跡は北部地区に縄文時代中期の墓壇群を中心とする集落の全貌が現われ次年度の調査によって結着をつけざるを得ないこととなった。48年度から新幹線班で調査担当した宍倉圭介氏が県立遠野農業高校へ、菊池久氏は釜石市立大松小学校へそれぞれ年度末人事異動で転勤された。

昭和52年度 調査員6名、補助員7名、調査期間4月11日～12月15日 1遺跡。

紫波町西田遺跡のみの調査となった。縄文時代中期における墓壇群、円筒形ピット群、貯蔵穴群、住居跡群によって構成された大遺跡の調査をもって新幹線関連48全遺跡の発掘調査を終了した。調査の整理はそれぞれの年度における発掘調査終了後、分室において図面、写真、遺物等の整理を一部実施した。

(3) 整理・報告書作成の経過

昭和53年度 調査員6名、補助員12名。

53・54年度の2年間にわたる本格的な整理作業に入った。本年度は48遺跡のうち40遺跡の報告書作成のための作業を実施した。報告書は3分冊とし、1分冊は一関・江刺地区(10遺跡)、2分冊は北上・花巻・石鳥谷地区(11遺跡)、3分冊には紫波・矢巾・都南・盛岡地区(19遺跡)を収録した。

2. 調査の方法

各遺跡の調査は原則として以下のような方法を用いた。

調査対象範囲の選定

新幹線建設地内、及び付帯施設建設地内にかかる遺跡は、全て調査対象とした。

調査区の設定

調査対象範囲全域にグリッドを設定し、計画的な調査と同時に遺構の平面的位置の把握につとめた。グリッドは調査地の地形を考慮し、東北新幹線の任意の中心杭の2点（東京基点の距離程が明示してあるもの）を原点とし、両者を結ぶ線、およびこれに直交する線を基準線とし3 m単位に割付け、30 mで1地区とした。グリッド名は東西方向を数字、南北方向をアルファベットで表わし、両者の組合せで呼称した。なお、地区名は調査区の北から順に設定した。

発掘の方法

(1) 探索発掘と全面発掘

調査対象範囲内における遺構の分布状況を調べるため、原則として3 m×3 mのグリッドを市松状に粗掘し、検出作業を進めた。また、基本的な層位の把握のための深掘りを設定した。遺構や遺物を含む層が検出された場合は、その具体的内容と分布関係などを究明するため、必要な範囲にわたって全面発掘を行なった。

(2) 遺構調査の方法

検出された遺構については、該当のグリッド名を付した。その場合、最も北西に位置するグリッドで呼称した。遺構の精査にあたっては、記述項目を統一したカードなどを使用した。

(3) 遺物の取り上げ

a. 遺物は原則としてグリッドごとに取り上げ、遺跡記号、出土年月日、出土地点、出土層位を記録の上、取り上げた。

b. 出土遺物のうち、その遺構に直接関係するものや、年代決定資料となり得るものについては、出土レベルと位置を平面図に記録し、遺物番号を付して取り上げた。

(4) 実測図の作成

断面図—断面図は基本層位、遺構の堆積状態や遺構細部の在り方を示す遺構断面を作成した。原則として、原図の縮尺は $\frac{1}{20}$ であるが、カマド、炉、埋設土器などの細部については、必要に応じて $\frac{1}{10}$ などの縮尺を用いた。各層における土色、土性、混入物、堅さ、遺物のあり方などの注記は統一を心がけたが一部統一を欠いたものもある。

平面図—平面図は調査区全域を表現したもの、遺構や遺物包含層での遺物の出土状況を記録

するための部分的なものがある。原図の縮尺は $\frac{1}{20}$ を原則としたが、必要に応じて $\frac{1}{10}$ などの縮尺を用いた。測量方法は、遣り方測量により作図した。

(5) 写真の記録

記録として撮影した写真には、35mm版モノクロ写真、35mm版カラー写真、35mm版エクタクローム写真（スライド用）、6×7cmモノクロ写真、35mm版赤外線写真などがある。

(6) その他の記録

調査記録として、調査日誌、業務日誌を各遺跡ごとに備え、記録した。また、調査終了後の整理時においても、業務日誌、作業記録、遺構カードを備え、記録した。

(第II表) 第II分冊収録遺跡基準線方向角

(N…座標北)

遺跡名	原点距離程	原点間方向角
八木畑遺跡	442.400km—442.500km	N—E 2°04'40"
松ノ木〃〃	442.900km—442.920km	N—E 7°25'00"
西野〃〃	443.580km—443.600km	N—E 17°45'00"
野田I〃〃	448.300km—448.820km	N—E 24°30'00"
〃II〃〃	449.380km—449.400km	N—E 14°45'00"
堀ノ内〃〃	453.540km—453.560km	N—E 15°25'00"
高松〃〃	457.640km—457.680km	N—E 15°00'00"
八幡〃〃	459.920km—459.960km	N—E 14°30'00"
大明神〃〃	466.100km—466.120km	N—W 3°02'30"
大曲〃〃	466.720km—466.760km	N—W 3°02'30"
幅〃〃	467.540km—467.600km	N—W 3°02'30"

3. 整理の方法

(1) 図面整理の方法

発掘調査時に作成した図面は次のような要領で整理した。

第一原図は、点検、修正の上、登録番号を付し、それをもとに第二原図を作成し、それぞれを図面台帳に記載した。

(2) 遺物整理の方法

遺物のうち、発掘現場で接合作業まで進んだものもあるが、ほとんどは分室で進めた。これらの遺物は、洗浄し、遺跡記号、採取年月日、遺構、地区名、層位、遺物番号を付し、接合、復元作業を進めた。その後、分類作業を進める中で、資料化できる遺物について、実測図、拓本の作成をし、写真撮影をした。

(3) 写真整理の方法

写真は遺跡ごとにそれぞれのネガと密着焼付のものをアルバムに貼付し、遺構名、地区名、遺物番号、関係実測図番号、撮影方向などを記入し、整理した。

4. 広報活動の実施

調査内容を広く知らせ、文化財についての関心を深めてもらうことを意図し、次のような活動をした。

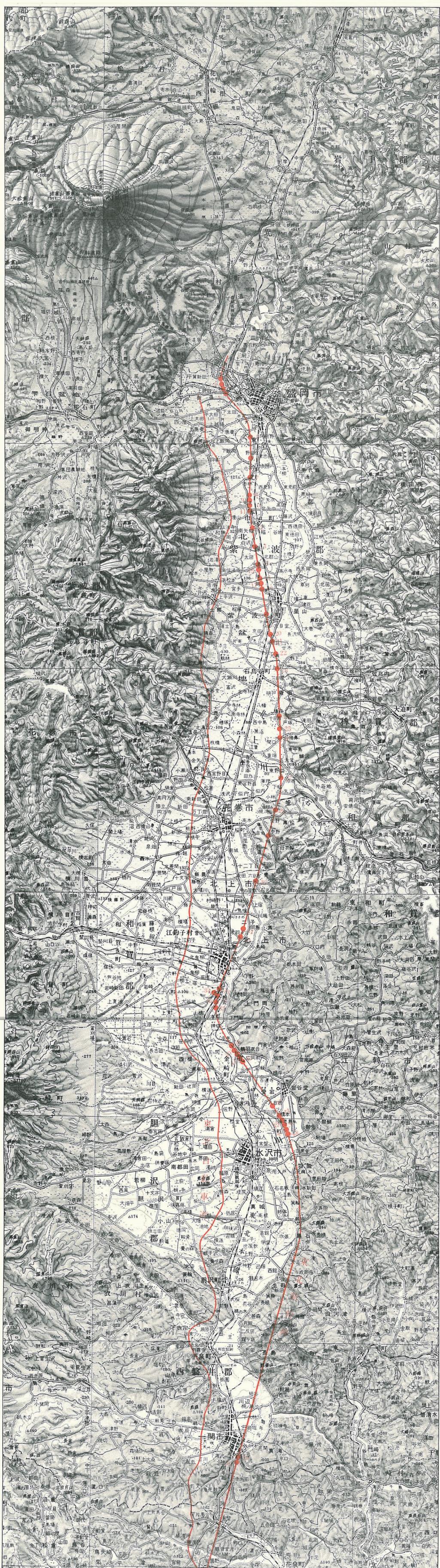
- ・現地説明会
- ・現場だよりの発行
- ・関係機関への資料提供

(第II表) 東北新幹線関係遺跡一覧

(位置一覧は第I図を参照)

所在地	遺跡名	調査対象面積	調査期間	収録報告書No.
一関市	機織山 I 遺跡	3,500m ²	50. 9. 30~50. 11. 29	I
"	機織山 II 遺跡	1,470	50. 9. 22~50. 11. 11	"
江刺市	中屋敷遺跡	5,000	48. 12. 10~48. 12. 22	"
"	鴻ノ巣館遺跡	6,400	49. 6. 24~49. 10. 23	V
"	力石遺跡	2,240	49. 4. 8~49. 4. 18	I
"	落合 I 遺跡	2,560	49. 4. 18~49. 8. 6	"
"	落合 II 遺跡	2,420	49. 4. 8~49. 8. 8	VI
"	宮地遺跡	3,600	50. 9. 1~51. 7. 26	IV
"	鶴羽衣遺跡	1,280	49. 4. 9~49. 5. 14	I
"	鶴羽衣台遺跡	960	49. 4. 19~49. 5. 10	"
"	瀬谷子遺跡	2,400	49. 5. 8~49. 6. 19	"
"	五十瀬神社前遺跡	1,600	49. 6. 4~49. 7. 30	"
"	谷地遺跡	2,720	49. 7. 25~49. 9. 3	"
北上市	八木畑遺跡	800	49. 11. 28~49. 12. 9	II
"	松ノ木遺跡	480	50. 12. 16~50. 12. 25	"
"	西野遺跡	5,000	50. 9. 1~50. 12. 25	"
"	南館遺跡	4,660	48. 5. 1~48. 7. 26	VI
"	鬼柳西裏遺跡	4,400	50. 9. 3~51. 12. 15	"
"	野田 I 遺跡	3,000	51. 8. 6~51. 8. 28	II
"	野田 II 遺跡	1,920	50. 9. 1~50. 9. 19	"
"	堀ノ内遺跡	2,400	50. 7. 7~50. 8. 30	"
花巻市	高松遺跡	2,000	50. 6. 4~50. 7. 9	"
"	八幡遺跡	1,800	51. 10. 7~51. 11. 25	"
石鳥谷町	高畑遺跡	2,720	49. 10. 25~49. 12. 20	V
"	大明神遺跡	3,680	49. 10. 25~49. 11. 22	II
"	大曲遺跡	1,920	49. 10. 25~49. 12. 12	"
"	幅遺跡	2,400	49. 11. 18~49. 11. 29	"
紫波町	野上遺跡	2,400	49. 10. 17~49. 10. 29	III
"	西田遺跡	29,600	50. 4. 26~52. 12. 15	VII
"	大銀遺跡	960	50. 4. 10~50. 4. 26	III
"	大日堂遺跡	2,240	50. 5. 16~50. 6. 10	"
"	田頭遺跡	1,760	49. 9. 5~49. 10. 16	"
"	杉ノ上 III 遺跡	3,402	48. 10. 16~48. 12. 28	"
"	杉ノ上 II 遺跡	4,276	48. 10. 16~49. 1. 29	"
"	杉ノ上 I 遺跡	7,200	48. 7. 18~48. 10. 16	"
"	古館駅前遺跡	3,360	48. 10. 1~48. 11. 30	"
"	古館橋遺跡	4,200	48. 9. 18~48. 12. 8	"
矢巾町	白沢遺跡	3,726	48. 7. 20~48. 9. 29	V
"	又兵衛新田遺跡	2,080	49. 10. 18	III
"	高畑遺跡	640	47. 11. 24~47. 12. 2	"
"	下赤林 I 遺跡	2,720	47. 10. 25~47. 12. 16	"
"	下赤林 II 遺跡	3,200	48. 11. 13~48. 12. 19	"
"	下赤林 III 遺跡	2,560	47. 12. 2~47. 12. 18	"
都南村	下永井遺跡	1,760	50. 4. 10~50. 4. 24	"
"	津志田遺跡	4,800	50. 4. 23~50. 5. 15	"
盛岡市	南仙北遺跡	800	50. 4. 10~50. 4. 25	"
"	厨川柵擬定地	4,600	51. 5. 17~51. 10. 16	"
"	前九年 I 遺跡	5,150	51. 4. 23~51. 6. 3	"
"	前九年 II 遺跡	3,400	51. 4. 19~51. 6. 2	"
"	長畑遺跡	6,370	51. 4. 9~51. 5. 15	"

※ 杉ノ上 I・II・III 遺跡は 1 遺跡として登録してある。



1. 長 畑遺跡
2. 前九年II遺跡
3. 前九年I遺跡
4. 厨川柵跡遺跡
5. 南仙北遺跡
6. 津志田遺跡
7. 下永井遺跡
8. 下赤林III遺跡
9. 下赤林II遺跡
10. 下赤林I遺跡
11. 高 畑遺跡
12. 又兵衛新田遺跡
13. 白 沢遺跡
14. 古 館 橋遺跡
15. 古館駅前遺跡
16. 杉ノ上I遺跡
17. 杉ノ上II遺跡
18. 杉ノ上III遺跡
19. 田 頭遺跡
20. 大 日 堂遺跡
21. 大 銀遺跡
22. 西 田遺跡
23. 野 上遺跡
24. 幅 遺跡
25. 大 曲遺跡
26. 大 明 神遺跡
27. 高 畑遺跡
28. 八 幡遺跡
29. 高 松遺跡
30. 堀ノ内遺跡
31. 野 田 II遺跡
32. 野 田 I遺跡
33. 鬼柳西裏遺跡
34. 南 館遺跡
35. 西 野遺跡
36. 松ノ木遺跡
37. 八 木 畑遺跡
38. 谷 地遺跡
39. 五十瀬神社前遺跡
40. 瀬 谷 子遺跡
41. 鶴羽衣台遺跡
42. 鶴 羽 衣遺跡
43. 宮 地遺跡
44. 落 合 II遺跡
45. 落 合 I遺跡
46. 力 石遺跡
47. 鴻ノ巣遺跡
48. 中 屋 敷遺跡
49. 機織山II遺跡
50. 機織山I遺跡

第I図 東北新幹線関係遺跡位置図 ※ 杉ノ上I・II・III遺跡は1遺跡として登録してある。

本

文

北上地区（南部）の概観

1 北上地区（南部）の地形概観（第II図）

本地区は中央を北上川が南流し、西方から和賀川が東流して黒沢尻町の南東で北上川へ合流する。一方、和賀川の支流夏油川は北に流れ岩崎新田付近で和賀川に注ぐ、これらの河川は夫々河岸低地を形成し、北上川河岸低地により本地域の地形を二分する。即ち、西部は扇状地の台地群を、東部は小起伏山地を含有する丘陵地形を形成している。

西部の台地群は、分水嶺を奥羽山脈にもち、それより東流する河川が洪水と流路の変遷を繰り返し扇状地や段丘を形成し、河岸低地との境界に段丘崖の発達をみることができる。和賀川と支流の夏油川、胆沢川とその支流永沢川、及び黒沢川が東流し巾1～2kmの河岸低地を形成している。これに対して東部の大部分は標高200～300m内外の丘陵地から成り、段丘の発達は西部に比べ著しく不良である。本地域は台地の発達が顕著で岩谷堂台地、稲瀬台地、玉里台地等の発達をみる。また地形的には明神岳、珊瑚岳などの山地も含むが広範囲にまたがるものではない。一方、北上川低地には自然提防がよく発達し六原付近、相去付近、黒沢尻付近、二子付近などにみられる。

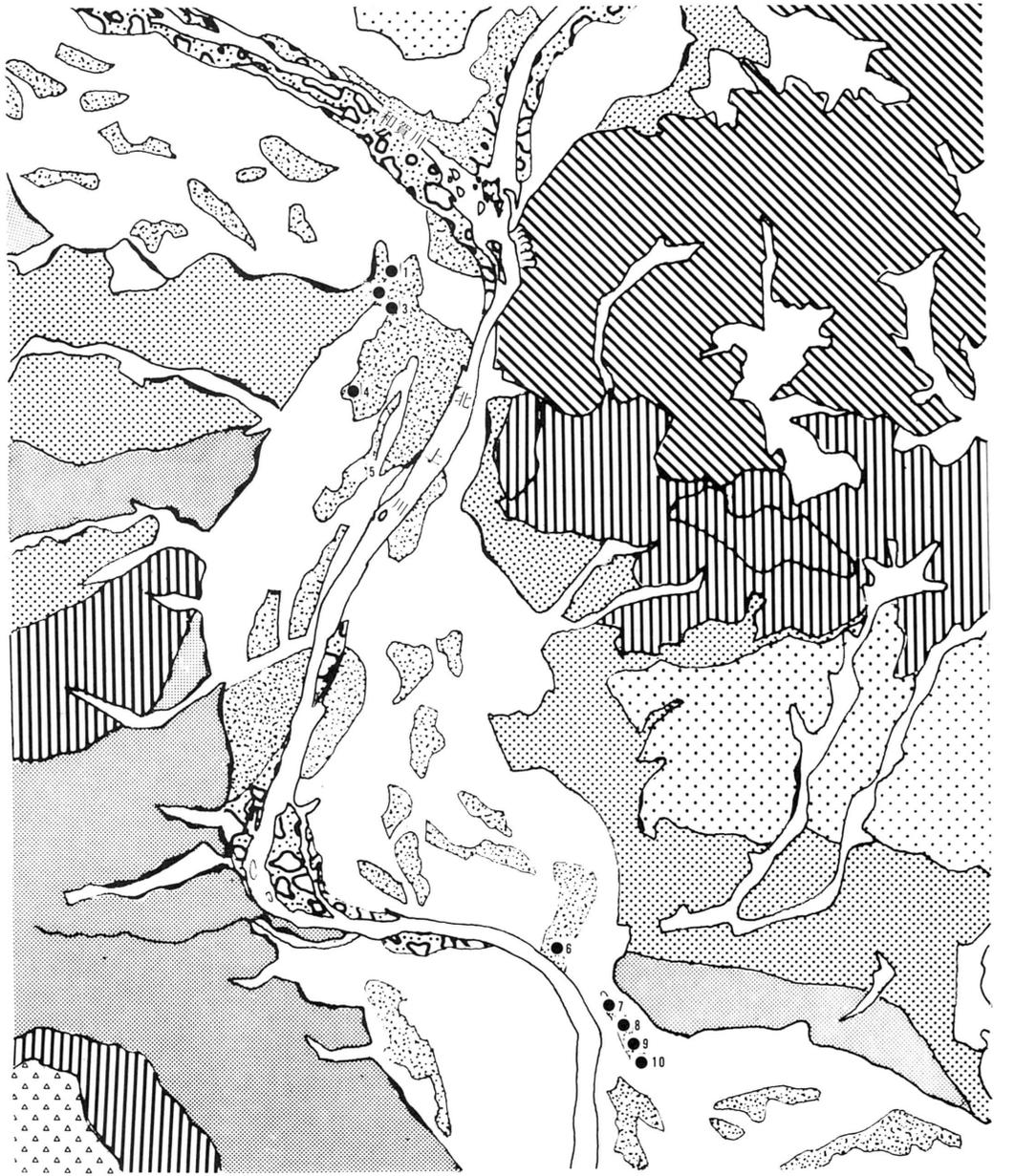
次に北上川西部の台地は北上川中流域沿岸の段丘発達地域の中央部を占めている。ここには六原段丘、西根段丘、村崎野段丘、金ヶ崎段丘などがあり、金ヶ崎段丘は山麓部から東方へ広大な扇状地をなして広がる。この金ヶ崎段丘に埋め残された形で、かなりの面積を占める村崎野段丘の発達がみられる。西根段丘は六原付近で金ヶ崎段丘にとり囲まれて残片的に分布し西方の後背地縁部によく発達している。以上から本地区の地形は概ね三地形区に分けられる。

第1は台地、段丘によって形成された西部地区、第2は北上川の沖積作用による河岸低地、第3は北上川東部の丘陵性山地群である。東北新幹線はこのうち第2地区を主として走ることになる。

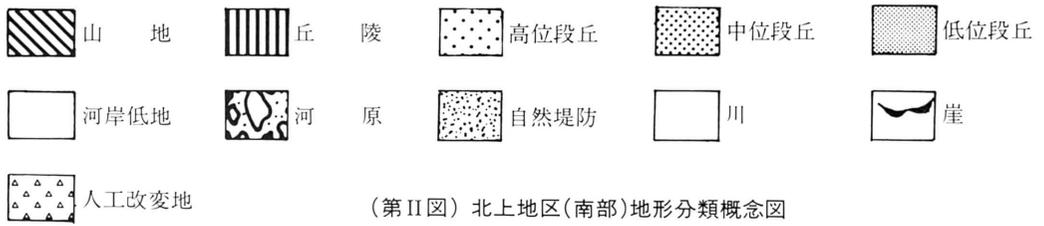
なお（第II図）の地形分類概念図は岩手県企画開発室発行の北上山系開発地域土地分類基本調査「北上」を参照した。

2 周辺の遺跡（第III図、第III表）

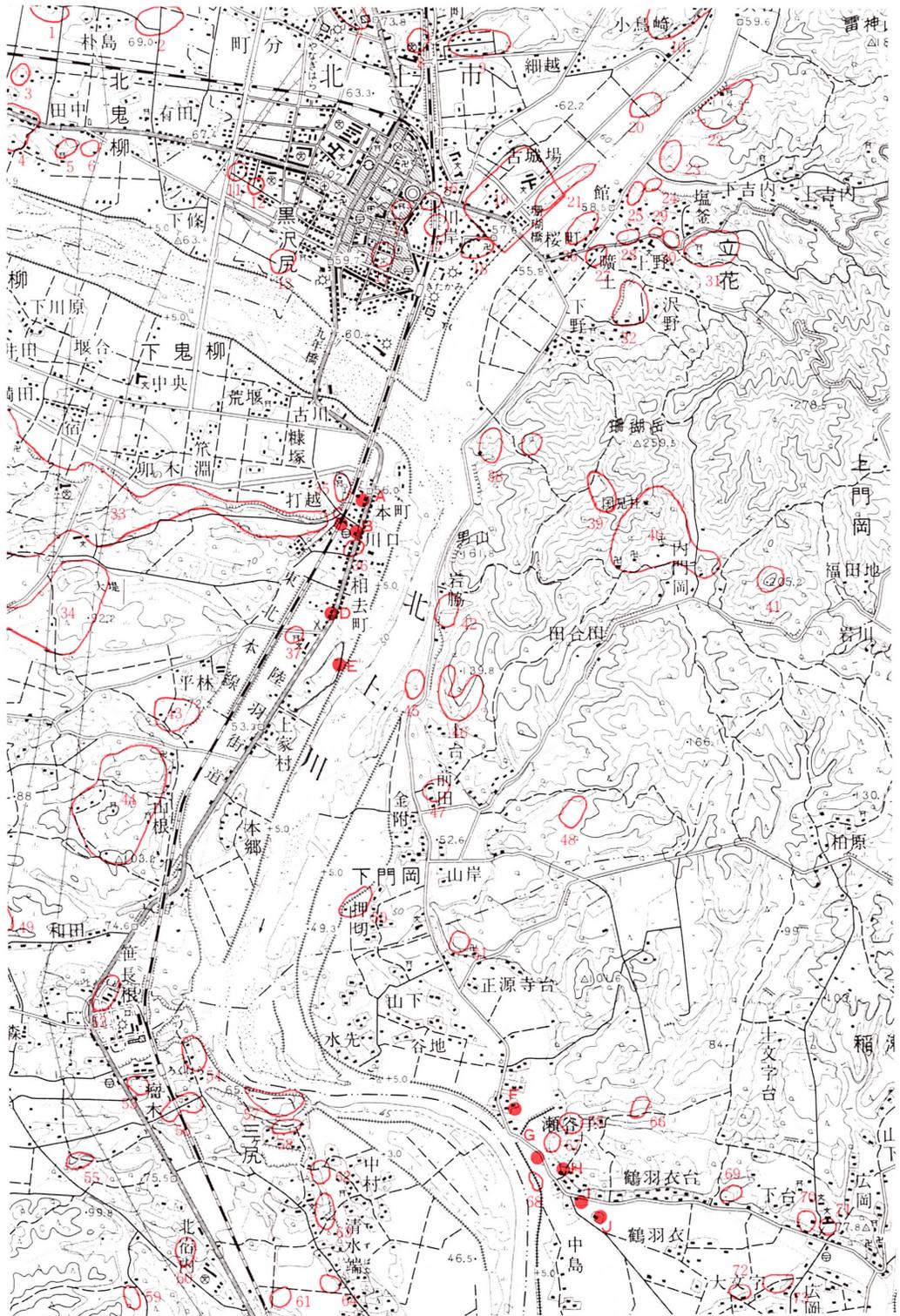
東北新幹線建設予定地内における遺跡は本地区内では南から鶴羽衣、鶴羽衣台、瀬谷子、五十瀬神社前、谷地、八木畑、松ノ木、南館、西野、鬼柳西裏の各遺跡がある。この他に本地区内の周知された遺跡は73遺跡にのぼる。この中で著名な遺跡を上げると下記ようになる。稲瀬町岩脇遺跡^{注1)}、斉羽場遺跡^{注2)}、同じく樺山遺跡がある。縄文晩期では九年橋遺跡^{注3)}、古墳群として



1. 鬼柳西裏遺跡 2. 南館遺跡 3. 西野遺跡 4. 松ノ木遺跡
 5. 八木畑遺跡 6. 谷地遺跡 7. 五十瀬神社前遺跡
 8. 瀬谷子遺跡 9. 鶴羽衣台遺跡 10. 鶴羽衣遺跡



(第II図) 北上地区(南部)地形分類概念図



- A 鬼柳西裏遺跡 B 西野遺跡 C 南館遺跡 D 松ノ木遺跡 E 八木畑遺跡 F 谷地遺跡 G 五十瀬神社前遺跡
 H 瀬谷子遺跡 I 鶴羽衣台遺跡 J 鶴羽衣遺跡

(第Ⅲ図) 遺跡の位置と周辺の遺跡

北上地区（南部）概観

和賀川河岸段丘上に構築された猫谷地古墳群^{注4)}、五条丸古墳群^{注5)}などがあり消滅したものも含め総数は数百基をこえる大群集墳と云われる。古窯遺跡^{注6)}として稲瀬町の瀬谷子、鶴羽衣台がある。廃寺跡では国見山極楽寺^{注7)}があげられる。館遺跡には鹿島館^{注8)}、丸古館^{注9)}があり、いずれも円状の連郭構造を持ったものと云われる。相去台地上には相去遺跡群^{注10)}がありこのうち高前田、高前壇遺跡^{注11)}は扇状地端部に占地した大集落跡と確認されている。その他近世では藩境塚、御番所、御仮屋などがあげられる。

(第III表) 周辺の遺跡地名表

番号	遺跡名称	時代	番号	遺跡名称	時代	番号	遺跡名称	時代
1	下谷地遺跡	平安	25	館(II)遺跡	縄文(中)	49	赤坂遺跡	
2	曾山遺跡	平安	26	立花遺跡		50	馬場先遺跡	平安
3	上藤木遺跡		27	館(I)遺跡	縄文(中)	51	兵部館柵跡	平安
4	猫谷地古墳群	奈良	28	館(IV)遺跡	縄文	52	和田遺跡	縄文(晩)、平安
5	八幡古墳群	奈良、平安?	29	立花小学校下遺跡	縄文(後)	53	西浦遺跡	縄文
6	八幡館遺跡	平安	30	館(V)遺跡	縄文(後)	54	榴木遺跡	縄文
7	常盤台遺跡	平安	31	高館遺跡		55	北荒巻遺跡	縄文(中)、平安
8	黒沢尻北高ランド遺跡	平安	32	沢野遺跡		56	花沢遺跡	縄文
9	梨子山遺跡		33	柳上館		57	東浦洞穴遺跡	
10	鶴渡館遺跡		34	高前壇遺跡	平安	58	後生平遺跡	縄文
11	鍛冶町南遺跡		35	白髭遺跡		59	菖蒲沢II遺跡	縄文
12	火薬庫西遺跡		36	中成沢遺跡	平安	60	荒巻北遺跡	平安
13	九年橋遺跡	縄文(晩)	37	小糖沢遺跡	縄文(中)平安	61	二の台遺跡	縄文
14	諏訪神社境内遺跡	奈良、平安?	38	陣ヶ丘遺跡		62	十三塚	
15	清水小路東遺跡	平安	39	西谷遺跡		63	丸子館遺跡	
16	和野遺跡	縄文(中)	40	国見山廃寺跡	平安	64	七里塚	江戸
17	浮島古墳		41	八王子遺跡		65	瀬谷子窯跡	平安
18	黒沢尻柵跡		42	岩脇遺跡		66	稲瀬古墳群	
19	方八丁遺跡		43	平林遺跡	平安	67	蔦ノ木遺跡	縄文、平安
20	ボタン畑遺跡	縄文(晩)	44	鶴野館、館、山根、梨ノ木I、II、館、木、奈良山遺跡	奈良、平安	68	中島遺跡	平安
21	上川岸遺跡	奈良、平安?	45	齊羽場遺跡	旧石器、縄文	69	鶴羽衣柵跡	
22	岩溪遺跡		46	上の台遺跡		70	稲瀬中学校遺跡	奈良、平安
23	横町遺跡		47	相田遺跡		71	稲瀬小学校遺跡	
24	館(III)遺跡	縄文(中)	48	下門岡・ひじり塚		72	十三遺跡	奈良、平安?
						73	大文字遺跡	

注1

北上市 「北上市史」 第1巻

注2

注3 北上市教育委員会 「九年橋遺跡調査報告書」 昭52. 53

注4 北上市 「北上市史」 第1巻

注5 岩手県教育委員会文化課 「猫谷地遺跡現説資料」 昭50

注6 江刺市教育委員会 「瀬谷子遺跡」 昭46

注7 北上市 「北上市史」 第1巻

注8 北上市教育委員会 「鹿島館遺跡調査報告書 II」 昭50

注9 北上市教育委員会 「相去遺跡現説資料」 昭48

注10 奥羽史談 「南部と仙台の藩境」 及川大溪

注11 岩手県教育委員会文化課 「発掘調査略報」 昭50

やぎはた 八木畑遺跡

遺跡記号：YG

所在地：北上市相去町字口ノ木27-1他

調査期間：昭和49年11月28日～12月9日

調査対象面積：800㎡

平面測量基準点：東京基点 442.500km (BA50)

基準高：海拔 54.00 m

1. 遺跡の位置と環境（第II図P12、第III図P13）

八木畑遺跡は、北上市相去地内に所在し、東北本線北上駅より直線にして南へ 3.3kmに位置する。遺跡は、現北上川流路まで約 300mの近接地にあり、旧国道から分れた市道（国見橋線）が国見橋にさしかかる左手前、北上川低地の氾濫原に形成された微高地上にある。遺跡の現状は、畑地、旧水田（休耕地）、草地などになっており、ほぼ平坦な地形をなしている。標高は約54mであり、周辺一部水田面との比高は最高約 1 m弱である。

2. 調査の方法と経過

本遺跡は、東北新幹線建設事業の施行に伴って、昭和47年に実施した遺跡の分布調査の結果発見された遺跡で、若干の土師器片が散布していた。調査は、路線敷内の遺跡全体を対象に約 800㎡を1辺 3 m× 3 mのグリッドを設定し、市松状に表土を除去し、遺構の有無、遺物分布の状況を調査した。中心軸、基準点の位置については別記のとおりである。

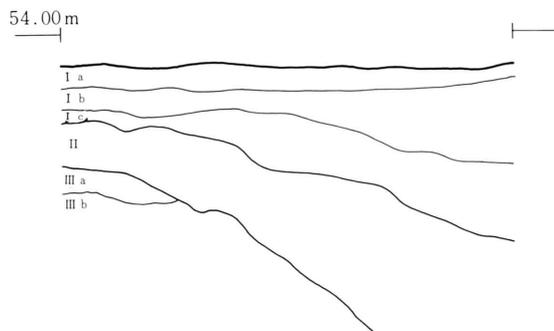
発掘調査は、降雪期に入っていたため、種々の困難を伴った。

3. 調査の結果

〔1〕基本層位（第1図）

遺跡の基本的層位をB F 03グリッド深掘りの東壁面セクションにより記述すると次のようである。

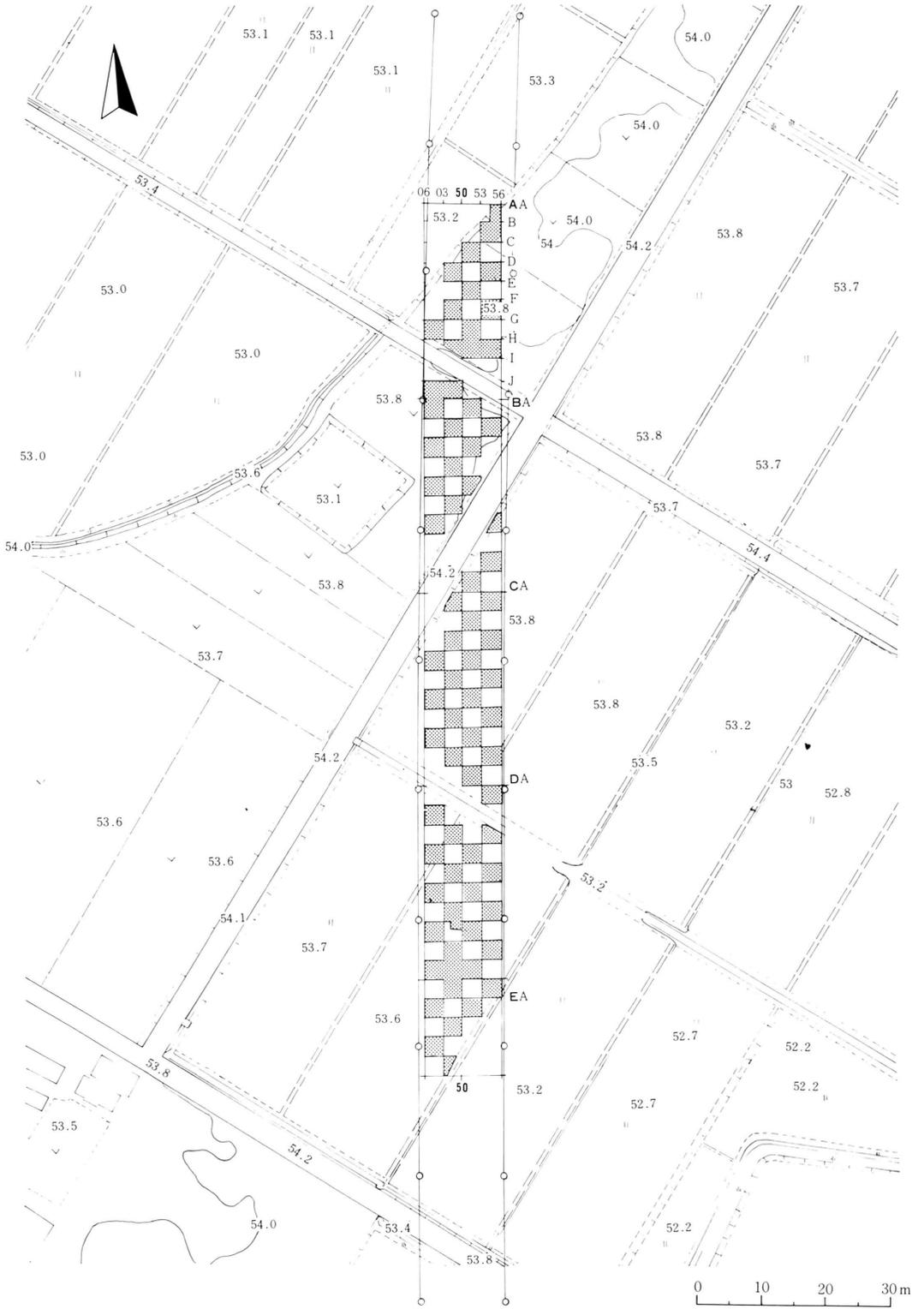
（I a層）シルトで構成される層で耕作、草木根による攪乱が見られる。間隙性があり、ぼさぼさし柔らかい。色調は、暗褐色土（10Y R 5/3）で砂粒も含まれる。出土遺物はI a層からのものが多数を占める。



層	土色	土性
I a	暗褐色10Y R 5/3	(表土)砂粒含みのシルト
I b	褐色10Y R 5/4	(#)粘性の強いシルト、炭化粒含む
I c	暗褐色10Y R 5/3	(#)II層がブロック状に含む
II	橙色10Y R 5/6	(地山)粘土質シルト
III a	褐色10Y R 5/3	(砂層)や、粗い砂でシルトが若干入る
III b	黄褐色10Y R 5/3	(砂層)細砂、シルトも若干含まれる

（第1図）B F 03土層断面図

八木畑遺跡



(第2図) 八木畑遺跡グリッド配置図

(I b層) 粘性の強いシルト層で、若干の炭化粒を含む。遺物出土は少量である。(褐色土10 Y R ¼)

(I c層) シルトによって構成される層で、I b層よりはべとつきが少ない。II層の粘土質シルトのブロックが若干入り込んでいる。この層には、基本的には遺物を含んでいない。

(III層) 砂によって構成されている層。北上川の作用と考えられる層の変化がみられ、北上川に面した位置ほど、砂の流失がみられる。

〔2〕発見された遺構と遺物

調査の結果、少量の土器片が発見されたのみで、遺構は検出されなかった。出土位置は後述するが、全体的に散在した状況で出土した。I a層からの出土が多数を占める。

〔出土遺物〕 縄文土器33片、土師器39片(うち内黒3片)、須恵器95片である。いずれも小破片で磨滅が著しく、特に、縄文片は地文不明のものが多い。

縄文土器 (第3図・1～6、写真図版4-1)

いずれも深鉢型土器の小破片と考えられる。胎土は、いずれも砂分が多く、焼成は粗である。1：深鉢の頸部片である。頸部に横隆帯をめぐらし、胴部と区画している。横隆線直上に竹管での連続刺突文が施されている。隆帯の下半は縄文原体LRの地文である。2：口縁部片である。口唇部は丸くおさまり、そのまま直線的に胴部へのびている。地文はLRを原体とし、口唇部より斜方向に施している。3：深鉢の山形口縁の突起部片である。有孔突起になるものと思われる。4：胴部破片、地文は縄文原体単節LRの縦回転である。5：胴部破片で地文は撚糸Rの縦回転が施されている。6：胴部下半部である。地文の磨滅が著しく、一部に判別できるだけである。地文は縄文原体LRを右下斜方向に施している。

土師器 (第3図・7～9、写真図版3-1)

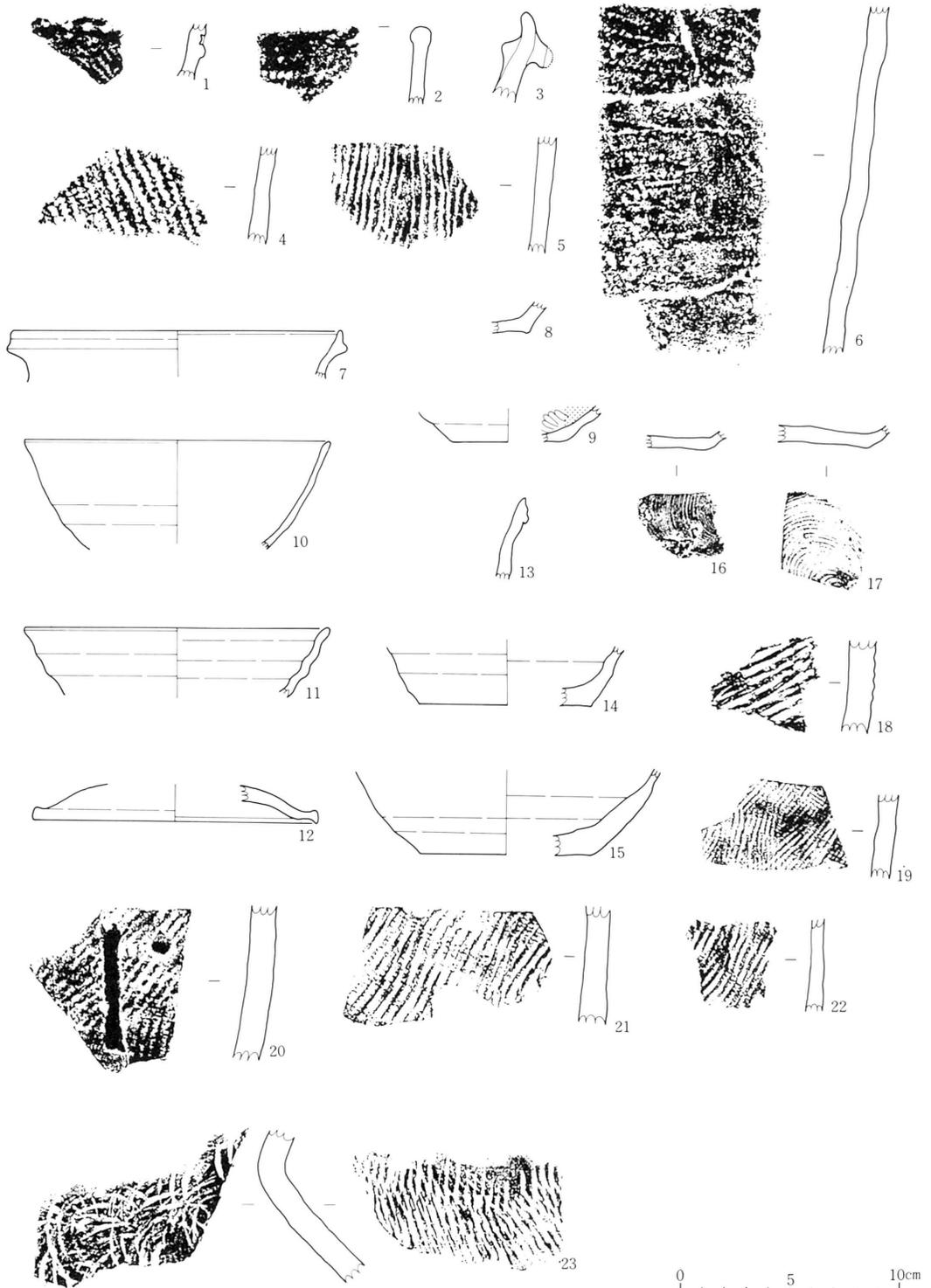
甕型土器、坏型土器の小破片であり、復元できるものはない。

7：甕型土器である。口唇部は上下に挽きだされるが、下への挽き出しは、横方向へ丸くおさまる形である。口縁部内外に横ナデがみられ、外反している。推定口径15cm。色調は浅黄橙を示し、焼成はやや硬質である。8：坏の底部片である。体部下半に手持ちヘラズリが若干みられるが、その方向等は判然としない。底部切離しは痕跡不明のため判断できない。9：坏の体部下半の破片である。内面をヘラミガキをし、黒色処理を施している。外面体部下半に黒斑が認められる。推定底部径は5cmである。内黒片は他に1片出土している。

須恵器 (第3図・10～23、写真図版3-2、4-2)

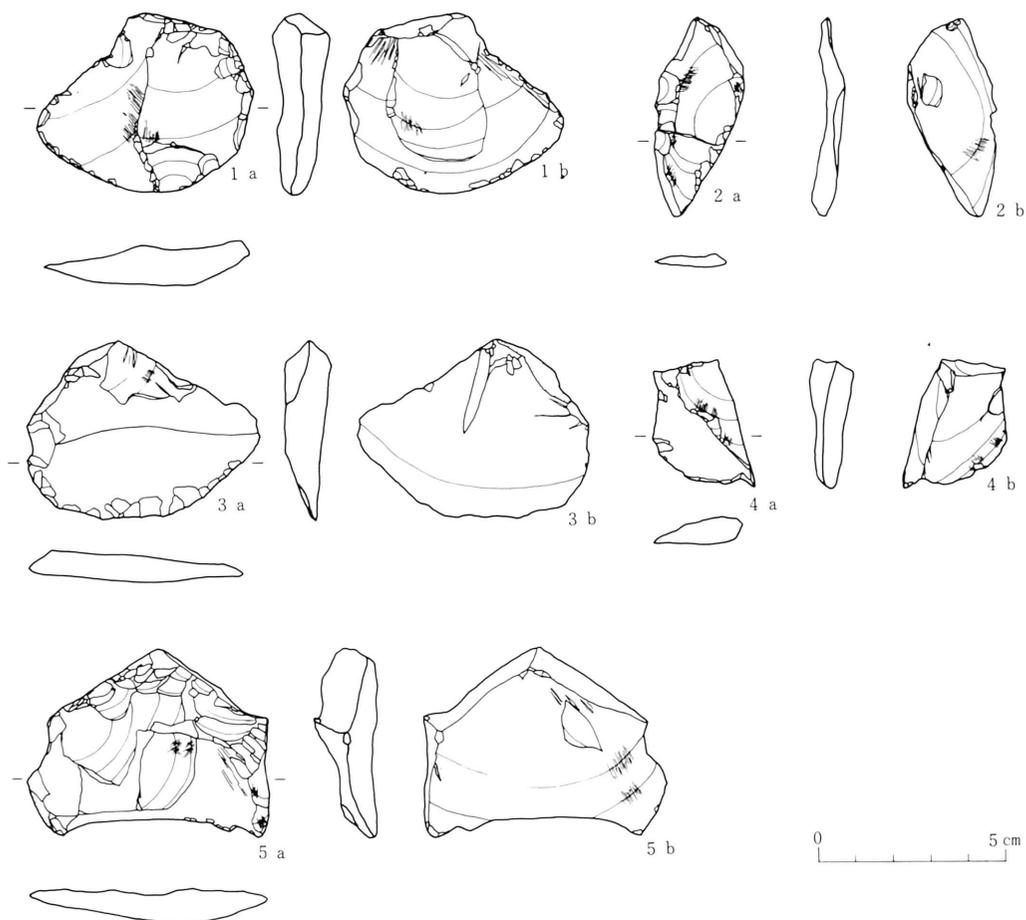
坏、蓋、甕片等がある。

10・11：10はB B 53耕土中、11はE B 06耕土中より出土した。共に推定口径14cmであり、10は



(第3図) 出土土器実測図および拓影図

体部がややゆるやかに丸味をもって立ち上がり、口唇部は若干外反する。底部切離しは不明である。焼成は硬質で、灰色を帯び胎土は密である。11は口縁部破片である。ロクロ成形によるものである。いずれも舌の残存破片である。12：坏の蓋である。CE03の耕土中から出土した。舌弱の残存破片であるが、貴重な資料となった。口唇部がかなり磨滅、欠損している。頂部が欠損しているので、器形全体は不明であるが、頂部からゆるく屈曲して縁部にいたり、縁部端が下に挽きだされる。13：小型甕の口縁部片である。口唇部は、断面三角形で下に大きく挽きだされ、上端は丸くおさまっている。14：小型甕の体・底部片である。底部切離しは、回転糸切りである。15：小型甕の体・底部片であるが、外面体部下半を縦方向にヘラナデを施している。底部は手持ちへら削りにより調整をしている。16・17：底部片（回転糸切り）18～23：甕体部破片であるが、器形を復元できるものはない。外面は平行叩き目文で青灰色（5B5/4）



(第4図) 石器実測図

(第1表) 石器計測表

写真図版	番 号	出 土 層	計 測 値				石 材	遺物記入番号
			長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重さ(g)		
図版4	1	I a	48	55	15	28.8	凝灰質硬質頁岩	№.7
"	2	"	47.5	23	6.5	4.6	"	5
"	3	"	47	61.5	12.5	27.4	チャート	2
"	4	"	32.5	24	11.5	6.8	凝灰質硬質頁岩	6
"	5	"	45.5	64	17	37.9	"	4

を呈する。23の内面は、同心円あて工具で叩きしめている。

剥片石器 (第4図1～5、写真図版4-4)

5点出土した。剥片の縁辺に調整剥離の加えられていない部分を残し、打面も部分的に残っているものである。石材は3のチャート以外は凝灰質頁岩である。

鉄滓 (写真図版4-3)

B C 06グリッドの耕土中から出土したが、その他の出土状況は不明である。(6.5cm×5.0cm×2.0)

4. まとめ

八木畑遺跡調査では、遺構の検出はなかったが、縄文、土師、須恵器の土器片が散見された。1片ではあるが、須恵器蓋の出土など数少ない遺物も出土したことから、調査対象ルート近接地に平安時代中頃の遺構が存在することが考えられる。

遺物の出土は、いずれも表土中からであることから、北上川氾濫原における土器の移動も一部考えられる。

出土遺物を調査区ごとに分類してみると、縄文土器はD、Eブロック、特にDGからEDグリッドにかけて多く出土している。このことから附近の路線西側畑地に縄文遺構が存在することが考えられる。

出土土器は磨滅が著しく、地文不明のものなど多いが、出土した一部土器片の中に有孔大突起片などがあり、他に縄文中期片も混在していることから縄文中期末葉のものと考えられる。また、土師、須恵器は、調査区全般に散在するが、特にDGからEDグリッドにかけて出土した。縄文片出土のグリッドと同一であることから、縄文、土師、須恵の遺構が同地区附近に存在することが考えられる。土師器は小破片のみであるが、底部切離しが回転糸切りであり、内

黒坯の破片が出土していることから平安時代中期のものと思われる。須恵器は、ほとんどが甕片であるが、蓋破片が出土したことに注目したい。

なお、DH06グリッドの西側旧水田耕作面から若干の焼土の分布（焼土と耕作土の混土）が認められたが、その範囲は削平のため正確な記録はとれなかった。（およそ40×30cm）

今回の調査では、対象ルート内に遺構の確認はできなかったが、焼土の分布も認められたことなどから調査区の隣接地、特に西側畑地と国見橋に至る市道の両端の微高地に縄文時代、および平安時代の遺構が存在することが予想される。

まつ 松 の き 木 遺 跡

遺 跡 記 号：MK

所 在 地：北上市相去町字松の木29-4 他

調 査 期 間：昭和50年12月16日～12月25日

調 査 対 象 面 積：480 m²

平 面 測 量 基 準 点：東京基点 442.920km (BA50)

基 準 高：海拔 56.20 m

1. 遺跡の位置と環境（第Ⅱ図P12、第Ⅲ図P13）

松ノ木遺跡は北上市相去町字松ノ木地内に所在し、国鉄東北線北上駅より南へ直線にして約2.5 kmに位置する。遺跡は相去地内の旧国道4号線西側に隣接し、遺跡の南端を小河川（小枝川）が東流し、東0.6 km程で北上川に注ぐ。

本遺跡は北上川で形成された標高60m程の北上川河岸低地の微高地上に立地する。遺跡の地目は殆どが宅地で一部僅かに蕨菜畑を残す。国道より東は水田として広がっており、遺跡とは1～2 m程の比高を測る。なお本遺跡の北0.5kmの新幹線ルート内には西野遺跡があり、更に南館、鬼柳西裏遺跡と続き、国道を越えた南0.5kmには八木畑遺跡がある。

2. 調査の方法と経過（第1図）

本遺跡は東北新幹線建設事業の施行に伴って昭和47年に実施した路線敷内の遺跡分布調査の結果発見されたものである。

調査は路線敷内の遺跡全体を対象にして、グリッド設定にかかわる測量より着手した。グリッドの設定にあたっては新幹線の中心杭東京起点442.900kmと920mの二点を結ぶ直線とその延長を遺跡の中心軸に定め、442.920kmを本遺跡の基準点（BA50）とした。このBA50を基点にして1辺3mのグリッドを設定し、市松状に表土を除去して遺構の探索につとめた。

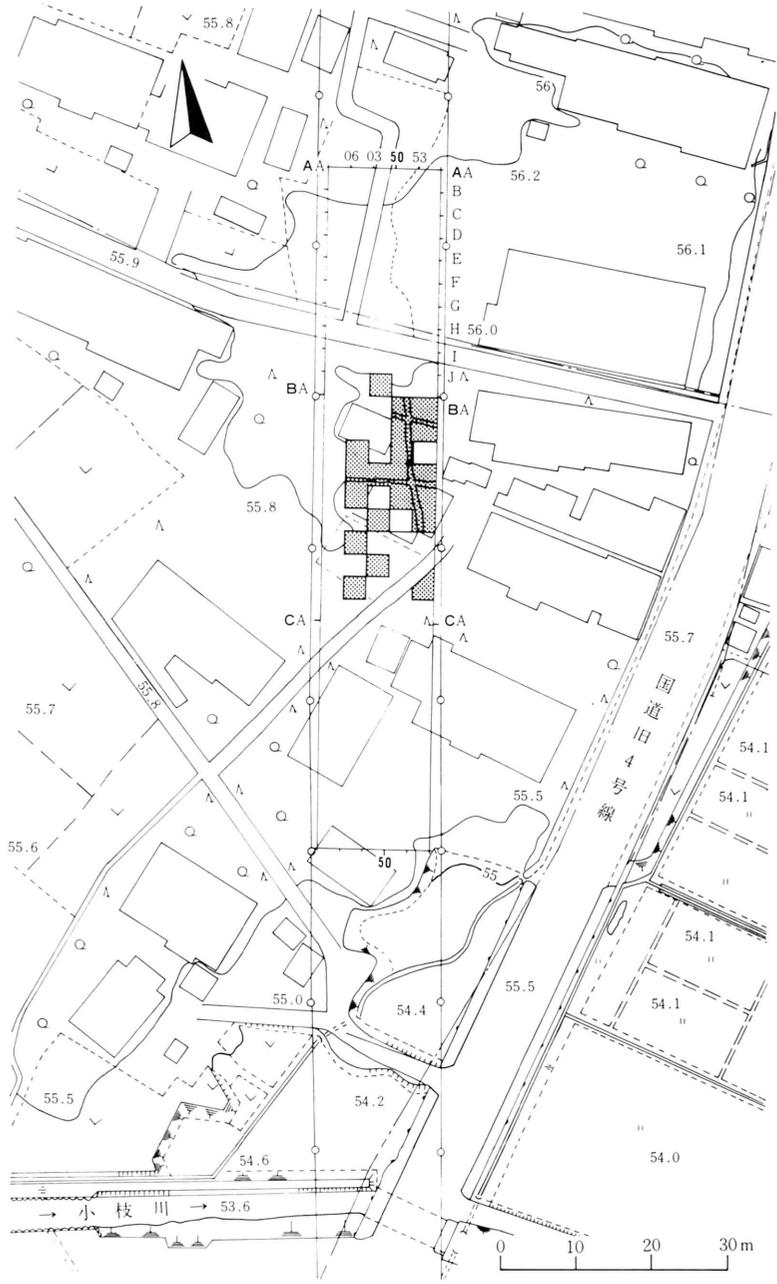
作業は比較的条件のよいBブロック（畑地部分）より実施した。調査区の殆どは宅地のため現状破壊が著しく、一部建物撤去の不完全のものもあり困難をきわめた。

3. 調査の結果

(1) 遺跡の基本層位

前述の如く本遺跡はその殆どが宅地及びその付帯施設と屋敷林で占められ、旧地表の移動の激しいところである。従って標準的層位の把握は困難であるが国鉄のボーリング結果もあわせて層位をみると以下ようになる。

第Ⅰ層：黒褐色(7.5YR $\frac{2}{2}$)土、黒ボクで構成され20～25cmの層厚を測る。若干の畑地を除いては宅地や小路となっており、上面に礫やレンガの破片を敷きつめ全般に攪乱が著しく、一



(第1図) 松ノ木遺跡グリッド配置図

部第Ⅲ層の地山面まで攪乱がおよんでいる。

第Ⅱ層：黒褐色(7.5Y R $\frac{3}{2}$)土、シルト質粘土、第Ⅰ層より若干の褐色をおびている。層厚は約10cmを測る。層中には僅かではあるが土器の細片を包含する。

第Ⅲ層：明褐色(7.5 Y R $\frac{5}{6}$)土、シルト質粘土(地山)。第Ⅱ層に比して粘性に富む。
なお国鉄ボーリング結果によれば、現地表面より3.5～3.8m程で砂礫層となる。^{注)}

(2) 発見された遺構と遺物(第2図)

調査の結果B区に集中して溝3本を検出した。遺構の掘り込み面はいずれも第Ⅱ層であるが実際の検出は第Ⅲ層上面(地山面)である。

B A 501溝

B A 50グリッドよりB F 50グリッドにかけてほぼ南北に走り、途中B A 502溝とB D 061溝と交叉して用地外へと延びる溝である。今回検出されたのはその一部で、検出された全長は18m程である。上巾約50cm、下巾約30cm程で検出面からの深さは15～20cmを測る。溝の壁は緩やかな傾斜をもち、底面は多少の凹凸はみられるものの全体としては平坦である。埋土は炭化物、焼土、それに明褐色土(地山)を粒子状～小ブロック状に含む黒褐色の単層である。

〔出土遺物〕 土師器の細片3片だけである。内面に黒色処理を施した坏の細片1、それにカメの体部破片2となっており、いずれも細片のため図化は不能である。

B A 502溝

B A 50グリッドより東西に走り、途中B A 501 溝と交叉する溝である。東は用地外に延びているが、西側は建物の基礎工事の際に破壊され追跡は不可能であった。西側も用地外に延びていると考えられる。

今回の検出は全長6m程で溝の中、深さそれに埋土の状況はB A 501溝と同じである。

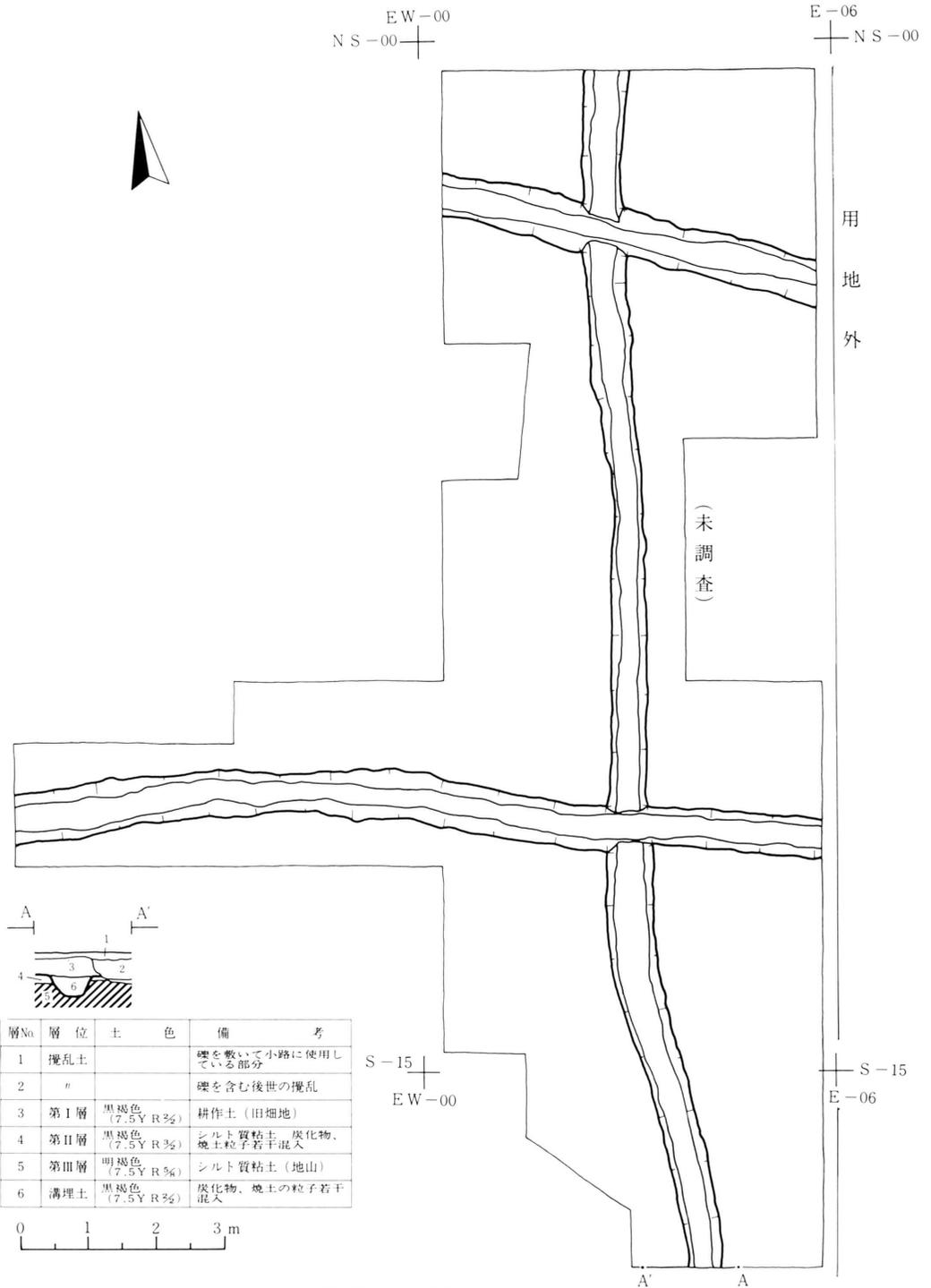
〔出土遺物〕 なし。

B D 061溝

B D 06グリッドより東西に走り、途中B D 50グリッドで南北に走るB A 501 溝と交叉して用地外へと延びる溝である。今回検出され溝の全長は約12mで、溝の中、それに深さはほぼB A 501 溝と同じである。埋土の状況も前述の2本の溝と同様である。

〔出土遺物〕 土師器、須恵器の細片34片を数えるが土師器が殆どである。器形の判別のつくものは土師器21片、須恵器2片だけである。土師器は全てロクロ成形で内面に黒色処理を施しており、回転糸切の坏底部5、体部は11片である。カメは5片を数える。須恵器は壺の口縁部小破片?となっている。土師器、須恵器共に細片のため図化は不可能である。

なお粗掘中に19片の土器片の出土をみているが、いずれも細片である。



(第2図) 溝平断面図

4. まとめ

今回の調査では調査区を南北に走る溝（B A 501 溝）とそれに交叉して東西に走る溝 2 本（B A 502 溝、B D 061 溝）の計 3 本の溝を検出した。3 本の溝についてその概略をまとめると次のようになる。

- ① 溝はいずれも全掘していないため全体の規模は不明である。
- ② 3 本の溝の中は殆ど同じ、底部のレベル差もない。
- ③ 溝の掘り込み面も同じで、重複関係については明確な切り合いはつかめない。
- ④ 埋土状況、遺物の出土状況も共通している。

次に遺構の時期、性格等について若干考えてみたい。時期決定の資料としては出土遺物があげられるが、溝から検出された遺物は直接遺構に伴うものではなく流れ込みであり、出土量も少ないため時期決定の積極的資料とはなり得ない。しかし遺物としては土師器、須恵器以外は何一つ出土せず埋土の状況、掘り込みの状況等から 3 本の溝はほぼ同時期と考え、一応平安期もしくはそれよりあまり下らない時期に比定できよう。

また性格、規模等については全掘していないため不明であるが、周辺からは土器片(土師器)等の採集も可能であり、北 0.5 km には西野遺跡の古代集落が新幹線ルートにかかわる遺跡調査で確認されており、地形的には当遺跡の近辺にも古代集落の存在も考えられる事から、或はそれ等に関係するものかも知れない。いずれ今後の周辺の調査に待ちたい。

注) 興亜開発株式会社・
日本国有鉄道盛岡工事局

「東北新幹線東京起点 441K 000m～447K 000m間地質調査その 2」昭47

西野遺跡

遺跡記号：NN

所在地：北上市相去町字西野12他

調査期間：昭和50年9月1日～12月25日

調査対象面積：5000㎡

平面測量基準点：東京基点 443.600km (CA50)

基準高：海拔 56.20 m

1. 遺跡の位置と環境（第Ⅱ図P12、第Ⅲ図P13）

西野遺跡は、北上市相去町字西野12番地に所在し、国鉄東北本線北上駅の南西2kmに位置している。本遺跡の北に和賀川が東流し、東北に北上川が南流して北東1kmの地点で両川は合流する。

和賀川の支流夏油川によって形成された金ヶ崎段丘とそれにとり囲まれた形で村崎野段丘が広がる。この村崎野段丘が東西にのびて急崖をなし、北上川河岸低地へと続く。村崎野段丘の構成層は砂及び粘土を基質とする礫層である。この礫層は飯豊礫層とよばれ、最上部は礫が疎となり粘土ないし砂まじりの粘土となる。その上位に整合的に黒沢尻火山灰（模式地＝北上市黒沢尻）がのっている。

本遺跡は上記の村崎野段丘の崖線下、北上川の自然堤防上に占地する遺跡である。また土地利用の現況は、畑地、草地、宅地等に利用されていたが、近年、畑地は耕作を中止し荒地と化していた。遺跡西端を東北本線が走り、鉄道施設の際、段丘東縁部が掘削され且つまた、戦後本線の復線化などによりかなりの土砂が動かされ、本遺跡の表土上に盛土として残されていた。

一方周辺の遺跡は南に小糠沢、松ノ木、八木畑の各遺跡が、西方に南館、滝ノ沢遺跡を、東に中成沢遺跡、北に鬼柳西裏、白髭遺跡等々がある。これらはいずれも村崎野段丘東縁部上か崖線下の自然堤防上に分布するものである。

2. 調査の方法と経過

西野遺跡は東北新幹線の建設にあたり、岩手県教育委員会が昭和47年6月に実施した分布調査によって発見された遺跡である。本遺跡は字名をもって「西野遺跡」と呼称するものである。

本調査は、東京起点443.600kmと443.580kmの二点を結びその直線の延長を遺跡の中心軸にした。なお、東京起点443.600kmを本遺跡の基準点とし、CA50と呼ぶことにした。

調査はCA50の基準点をもとに3×3mのグリッド方式で行ったが、遺跡を本線部分と保守基地部分の二ブロックに分けて行うこととし、最初に保守基地側から開始した。表土の上層は盛土層で、この層から縄文時代の遺物（土器、石器、石器未完成品等々）が若干出土した。保守基地北西端から掘立柱の建物跡を発見した。概ね遺構検出面はII a層の（黒ボク）であるため粗掘りを二段に分け慎重に遺構の検出につとめた。その結果、竪穴住居跡3棟を新たに発見した。

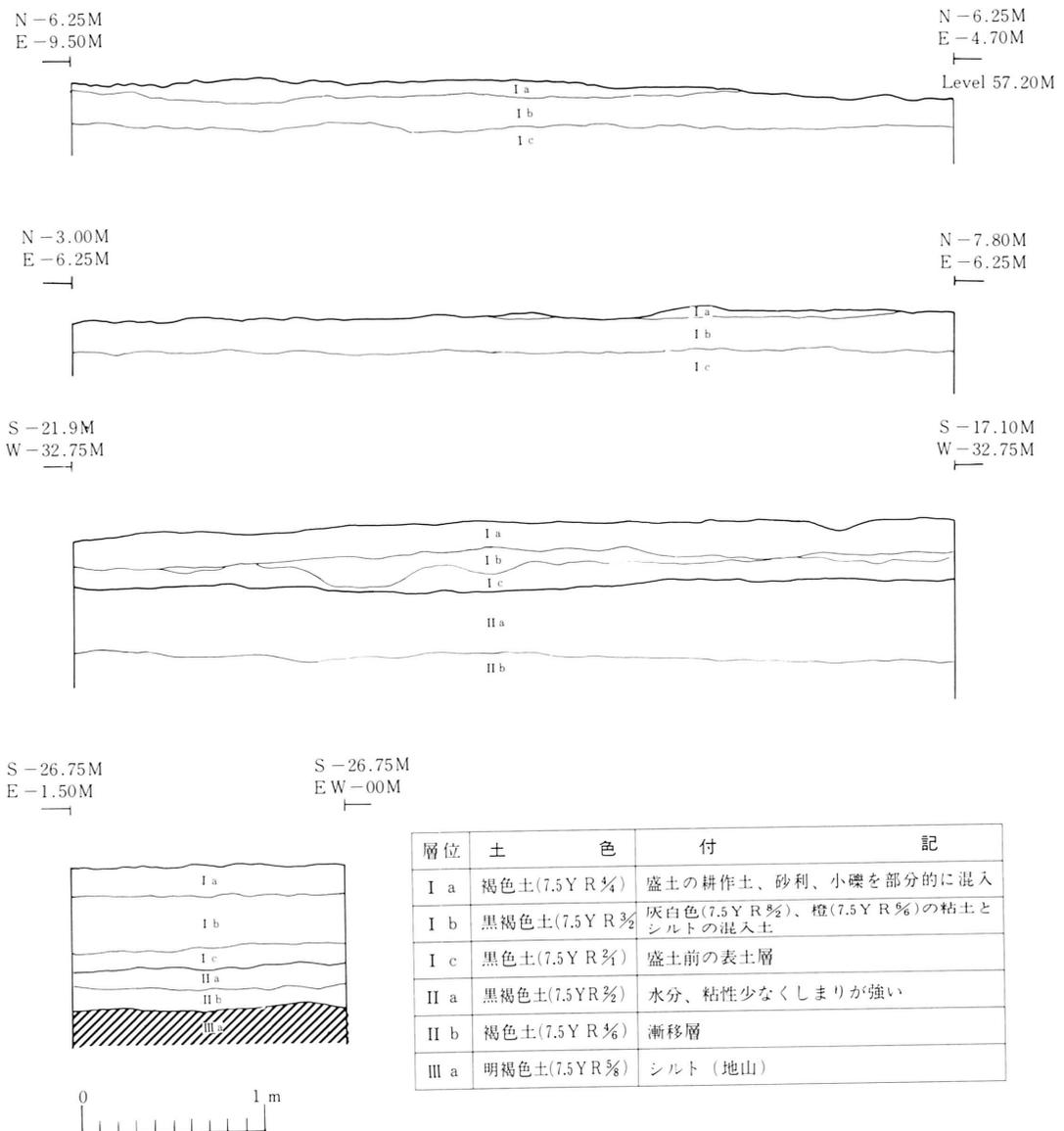


(第1図) グリッド配置図

3. 調査の結果

〔1〕 遺跡の基本層位

本遺跡の現況は前節で触れたごとくそのほとんどが畑地、宅地として利用されていたが、東北本線の復線化工事や近年の宅地造成等に伴い盛土、客土など地表の変動が著しく所によっては盛土の残土が認められた。



(第2図) 土層セクション図

したがって層位の把握のためB F 56、C J 50、C E 33、D H 39の4ヶ所で深掘りを行い土層の把握につとめた。その結果にもとづいて層位をみると基本的には次のようになる。第I層黒褐色土(7.5Y R 3/2)で有機物、腐植物を含み炭化物等の混入もみられ、元来畑地として利用されており基本的な層厚は20~30cmを測るが前述の攪乱、或は盛土の影響もあり場所によっては30~40cmを測る。特に西側の東北本線沿いと北側(Aブロック)はその影響の著しい所である。なお盛土内から若干の遺物の出土をみた。第II層は40~50cmの層厚を測るが2層に区分される。遺構はこのII層より掘り込まれている。II a層は黒褐色(7.5Y R 3/2)、粘土質シルト、土師器片や若干の有機物を混入し炭化物、焼土の粒子もわずかに含む、黒ボクで構成され20~30cmの層厚を測り、しまりは良好である。II b層は、褐色(7.5Y R 3/6)で粘土質シルト、層厚15~20cmを測り、しまりは良好で下部に移行するほど粘性を増す。第III層、明褐色(7.5Y R 5/8)、シルト質粘土(地山)でII層に比べかなりの粘性をもつ、国鉄ボーリング結果によれば以下は砂質となり現地表より1.8~2mほどの砂利層となる。

〔2〕 発見された遺構と遺物

(1) 竪穴住居跡

B G 53住居跡 (第3図、図版1の3)

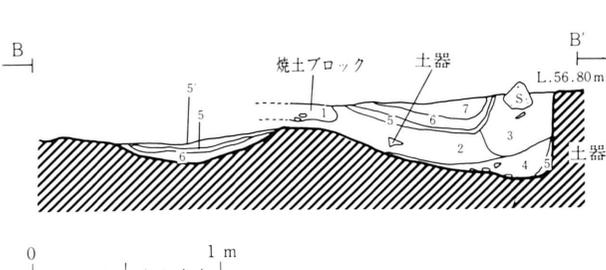
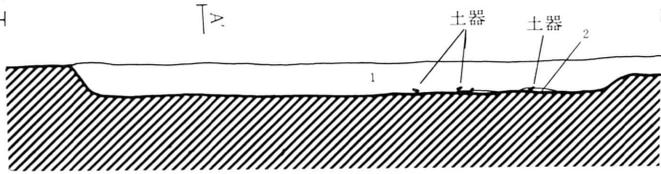
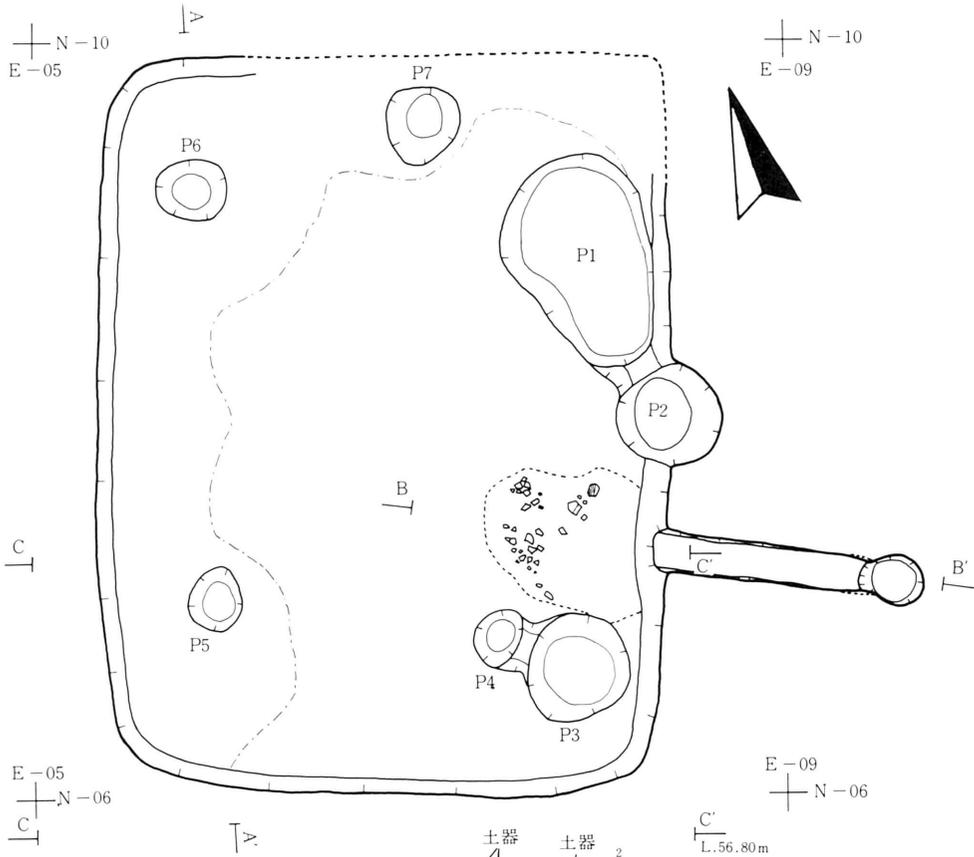
本線分の東北隅に発見された住居跡で、第II層の黒褐色土層中位から掘り込まれ床面はII b層の褐色土層に達するもので表土は約30cmを測る。

〔平面形〕 南北 3.9m、東西 3.0mの隅丸長方形プランを呈し、長軸方向はE-17°45'-Nを指している。

〔埋土〕 単層の埋土で7.5Y R 3/2の黒褐色土である。埋土中には雑草の根が入り、炭化物の粒子も混入していた。床面付近は若干の焼土と土器片が認められた。かまど焚口部近くは焼土の混入が著しく、7.5Y R 3/2~3/6の黒褐色から極暗褐色の土色となっている。埋土は全般に柔らかい。

〔壁、床面〕 壁高は南北壁で25~30cm、東西壁で10~15cmを測りやや浅い。壁の傾斜角は各壁とも約35度前後を測るものである。北壁と北東隅は攪乱により確認できなかった。床面は西側約1/3を除き固く踏み固められていたが貼床とは考えられない。床面はほぼ平坦で高低差は土5cmを測る。

〔柱穴〕 4個の柱穴を確認(P₄~P₇)できた。深さは18cm~25cmを測り、柱穴の底部は、わずかに丸味を帯び、いずれの柱穴も遺物や焼土の混入は認められなかったが若干の木炭の粒子を混入していた。P₄~P₇の柱穴はやや西壁に偏し、特にP₇は住居跡の中央線上に位置し著しく偏在するものである。



層位	土色	付記
1	黒褐色土(7.5Y R 2/2)	焼土がブロック状に混入
2	極暗褐色土(7.5Y R 2/2)	焼土、炭火物、土器片混入
3	黒色土(7.5Y R 2/2)	焼土、炭化物混入
4	黒褐色土(7.5Y R 2/2)	焼土、炭化物混入
5	赤褐色土(2.5Y R 2/2)	焼土化
5'	赤褐色土(2.5Y R 2/2)	著しく固い
6	赤褐色土(2.5Y R /)	加熱による焼土
7	黒色土(7.5Y R 2/2)	

(第3図) B G 53住居跡平断面図

〔ピット〕 P₁～P₃の3個のピットを検出、P₁は平面形が繭玉の形状を呈し最大である。P₂とP₃は円形でほぼ同規模である。深さは20cm前後とやや浅い。P₁の埋土は上層3～5cmまでは黒色土で割合柔らかく、以下は焼土、木炭の粒子及び土器片を混入している。P₂はP₁と類似し上層から土器片、鉄片を出土している。P₃は上層の黒色土が前者と異なりやや固めである。埋土中の混入物は土器片、焼土、木炭の粒子であるが量的には前者に劣る。

〔かまど〕 東壁やや南寄りに構築され煙道部の長軸方向はS-8°-Eである。袖部分は残存せず、焼土と土器片の出土状態から推測できるだけである。焼土の分布範囲は長径80cm、短径75cmで半円形状を呈するものである。焚口部と推定される部分は黒色土の基盤の上に3層にわたる焼土層が確認された。1層は焼土がブロック状に入りよごれ土、2層は固くやけた焼土層、3層は加熱により自然に焼土化したものである。火床部はレンズ状に凹状を呈している。煙道は東壁端より外方に伸び全長145cmを測る。煙道巾は最大約20cm、傾斜角は約15度で下降している。煙道内には土器片の混入が認められた。また煙出し部はほぼ直立し、上端径30cmで下端も同数値を測る。埋土の上層は黒色土で底部近くは7.5YR 7/4の暗褐色の色調を呈し焼土、炭化物の混入が著しい。

〔遺物出土状況〕 遺物は土師器環、甕類、その他の土器の坏及び石等で分布の濃密ヶ所はかまど焚口部、ピット3、ピット4の周辺部及び南壁やや西寄りの箇所である。本住居跡の遺物分布範囲は概して床面が固く踏みかためられた部分に集中し、西壁寄りの柔らかい床面からは破片1点のみが出土している。全般に遺物は南東隅に片寄る傾向をみせている。

〔出土遺物〕（第4図、図版5）

本住居跡出土の遺物は、土器類、鉄製品、植物種子の三種類で、土器は土師器環、高台付環、小形甕、中形甕等で出土点数は少ない。

土師器

坏1（第4図1、図版5の1） 住居跡埋土中から出土した坏で $\frac{1}{2}$ 弱を欠損、口径14.5cm、器高4.9cmを測る。内黒処理を施し、内面調整は口縁部、体部ともヘラミガキ、底部は放射状のヘラミガキを丹念に施こしている。外面は磨滅により調整は不明。底部は回転糸切り無調整で体部は丸味をもって外傾し中位から直線的に外傾、口縁部はわずかに外反する。

坏2（第4図2） 住居跡ピットから出土したもので全体の約 $\frac{3}{4}$ を欠損、口径14.8cm、器高4.2cmを測りやや浅形である。体部は内彎しながら外傾し口縁部は直線的に終熄する。器内面は黒色処理し、口縁部付近は横方向のヘラミガキ、底部は放射状のミガキを行っている。底部外面は回転糸切り無調整である。

甕1（第4図4、図版5の2） ピット1埋土中から出土の小形甕、口径10.8cm、胴径11cm、器高推定計測約9cmを測る。成形にロクロを用い、薄手作りである。胴部はふくらみをもち、

口縁部で「く」の字状に外反、口唇部は上方に挽き出され、断面形は三角形状を呈す。内外ともにロクロ水挽きの成形痕のみで他の調整は認められない。器肌は二次加熱を受け部分的に赤褐色に変色している。

甕 2（第4図5、図版3） ピット2の埋土中から出土した口縁部破片である。口径16cmを測り内外面とも調整は認められない。ロクロ成形で口縁部は「く」の字状に外反し口唇部はほぼ垂直に立ち上がり口縁帯をもつ。

甕 3（第4図6、図版4） 住居跡埋土中から出土、口縁部約 $\frac{1}{2}$ を残存、胴部付近は巻き上げ成形でその後ロクロによる調整を施こしている。口縁部は「く」の字状にゆるく外反、口唇部は上方に挽き出されている。内外面とも磨減が著しく、調整痕は認められない。

甕 4（第4図7、図版5） ピット1から出土した口径19cmの甕で体部下半から底部を欠損したものを復元実測。ロクロ成形で胴部がふくらみロクロ成形の凹凸が明瞭に残る。口縁部は極端に短かく「く」の字状に外反する。口唇部はほぼ垂直方向に挽き出されている。器内外面とも再調整は認められない。

甕 5（第4図9、図版5の6） 住居跡埋土中から出土、口径22.8cmを測り体部上半と口縁部の約 $\frac{1}{3}$ を残存する。ロクロ成形で体部上半の外面に縦方向のヘラケズリ調整が認められる。口縁部は強く「く」の字状に外反し、口唇部は上下方向に挽き出されている。内面には調整は認められない。胎土に石英粒子を含むが、焼成は硬く堅緻である。

甕 6（第4図10、図版5の7） 住居跡埋土中から出土した底部と体部下半の約 $\frac{1}{3}$ を残す破片で底部径6.9cmを測る。やや小形の甕で、ロクロ成形、底部は回転糸切りの非再調整。焼成は良好で灰白色を呈し硬質である。

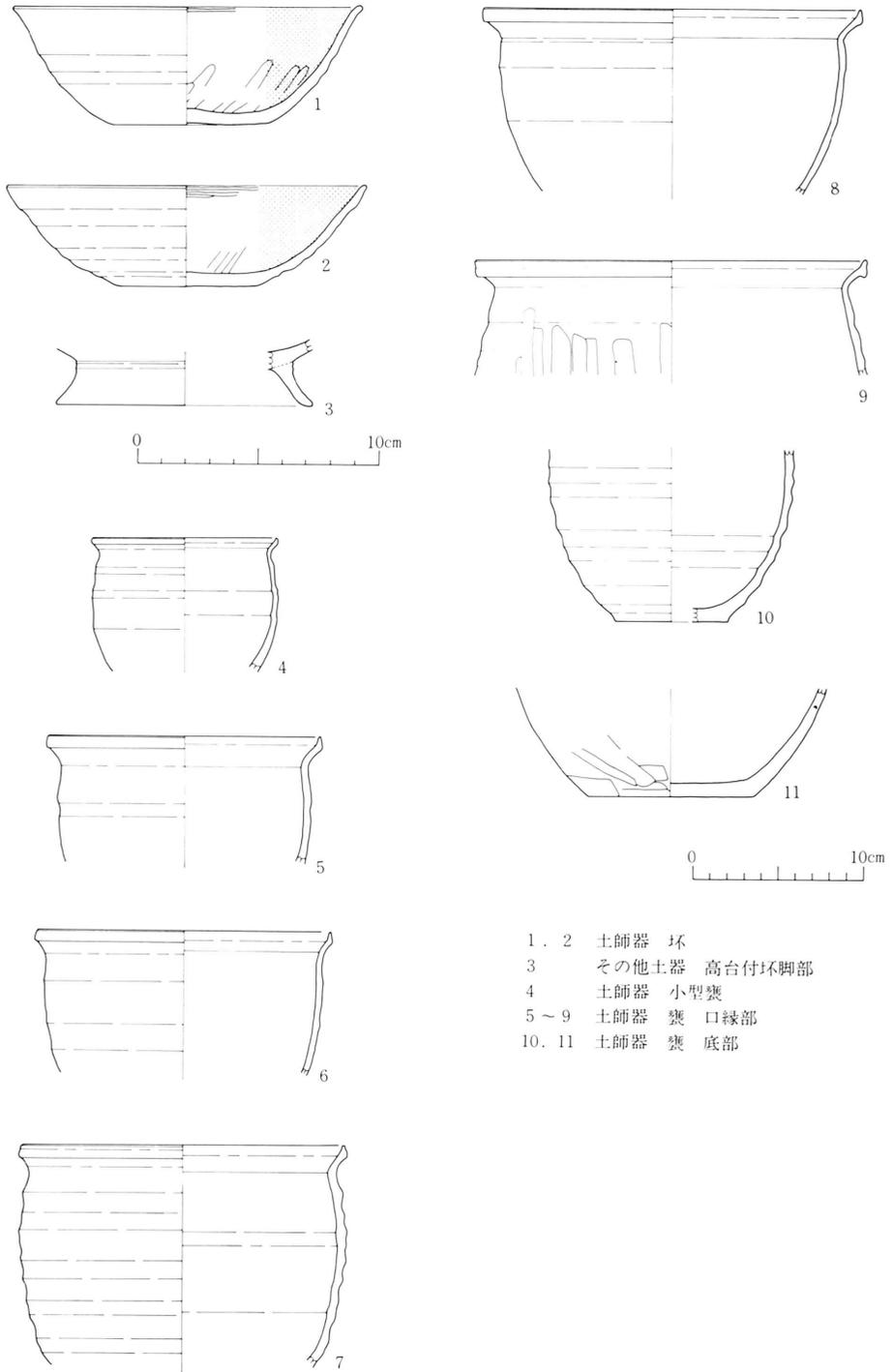
甕 7（第4図11、図版5の8） ピット、埋土中出土、かまど付近に分散していた破片を接合復元したものであるが底部の大半と、体部下半の一部を残し他を欠損している。底部径9.6cmを測り外面はケズリ調整を行っているが全般に器肌は荒れ気味である。底部内面は指ナデの調整がみられる。

その他の土器

高台付坏 1（第4図3） 住居跡内出土の高台付坏で脚部径10.6cmを測るが器高は低い。焼成は概してあまく脆い。

植物種子

ノスモモ（図版12の10） 床面出土、縦長1.8cm、横巾1.25cm、厚さ0.95cm、重さ1.0gを測り、色調は黒褐色を呈し光沢がある。基部は丸味をもち先端部は尖っている。体部の条は明瞭であり自然炭化によったものと思われる。



- 1. 2 土師器 坏
- 3 その他土器 高台付坏脚部
- 4 土師器 小型甕
- 5~9 土師器 甕 口縁部
- 10. 11 土師器 甕 底部

(第4図) B G 53住居跡出土土器実測図

C I 50住居跡（第5図）

本住居跡は本線部分の東側でB G 53住居跡の南約22mほどの位置で検出された。検出面は2 a層である。

〔平面形〕 南北 6.2m、東西 5.8mの隅丸長方形を呈し、長軸方向はN-7°-Wでわずかに西に偏っている。

〔堆積土〕 南北線は5層からなり、第1層は黒色土、第2層は黒褐色土、第3層は黒褐色土で第2層よりやや明るく、第4層は暗褐色土、第5層は第4層よりやや黒味を増す。第3層は焼土を多量に含み、また第4層は粉状パミスを混入していた。

〔壁高〕 東西で約30cm、南壁約35cm、北壁約30cmを夫々測りほぼ平均化している。周溝の痕跡は認められなかった。

〔床面〕 床面はほぼ平坦であるが部分的に高低差が若干見うけられる。また中央部から北東隅にかけやや落ち込み、南西隅は若干盛り上っている。さらに傾斜の顕著な部分は、南東隅で中央部との比高差約10cmを測る。

〔ピット〕 ピットは総数で32箇を数え、床面全体に分布する。形状は円形、楕円形、方形、不正形等形態はまちまちである。これらの土壌群中、柱穴と想定されるものはピット1から8までの8箇である。ピット1から4は東西巾約2m、南北巾3.8m~4.2mを測り南辺に偏っている。この柱穴群は形状、規模等から第1期の住居跡の支柱穴と推定される。また第2期はピット5から8までの4本で南北に対し東西に拡張したことが伺われる。柱穴、ピットの在り方から本住居跡は2期に亘り改築が試みられたものである。

柱穴以外の土壌は第1期、第2期の住居跡に伴うものと考えられるが夫々の新旧関係については判然としない。ピット9は貯蔵穴と考えられるし、ピット14は遺物出土状態から鉄器製作にかかわる土壌とみられ、柱穴とのかかわりから2期のものに相当するものと考えられる。

〔かまど〕 東壁南寄りに設けられている。袖、煙道、煙出しが検出された。焚口付近に焼土の散布が半円状に認められ、右袖内側に長径約30cm大の石が補強材として用いられている。煙道の壁に対しほぼ垂直に東方に伸び壁際からの計測で約2mを測る。煙出し部は煙道末端で南に若干の屈曲をみせている。また煙道部の内径は約30cmで削り貫き式となっている。煙道は焚口部の最奥から傾斜角約10度で下降し煙出しへ接続する。煙出しの底部はわずかに落ちこんでいる。

〔本住居跡の先後関係〕 本住居跡は2期にまたがって営まれたものとする。第1期の支柱穴に対し第2期は約1mほど西壁寄りに構築し、またピット6とピット7の北側2本も夫々50cm北壁に寄せてある。このことは第1期の住居跡を若干拡張して使用したものであろう。また床面上に多数のピットを検出したがこれらも2期にわたる土壌で、焼土、炭、のろ、鉄製品の

広がりなどから先後関係をみると、柱穴以外の土壌として第1期の住居跡に伴うものは、ピット11、14、24、27となり、第2期のものは9、10、11、12、14、17、18、20などとなる。以上から第1期はやや小規模の住居であったが第2期に至りそれを拡張したものと考えられる。第1期と第2期は継続して使用したものでどうかについては明確を期しがたいが、遺物等から推測して、継続しないにつけてもそれほどの時間的隔りはないものと考えられる。

〔出土遺物〕

本住居跡出土の遺物は、埋土、床面直上、ピット内などから主に出土している。遺物は、土器類、鉄器類、のろ、植物種子などにわたる。土器は土師器の坏、甕、須恵器は坏、小形壺、広口甕を、またその他の土器は坏を夫々出土している。鉄製品は轡、刀子、紡錘車、釘、および用途不明のものとなっている。床面からは板状ののろ、塊状ののろが多数発見され、また植物種子3点も共伴している。

土器

土師器（第6・7図、図版6・7）

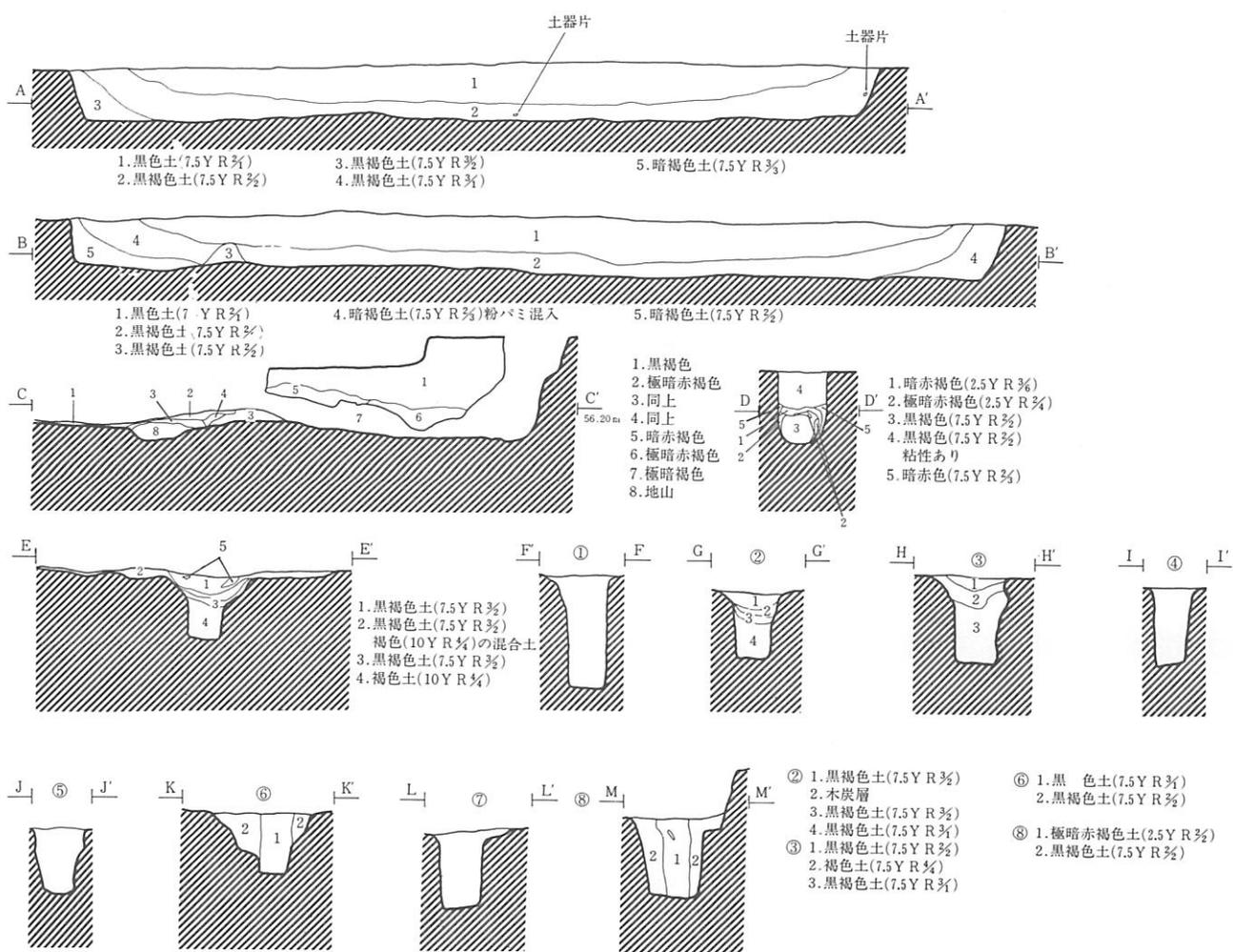
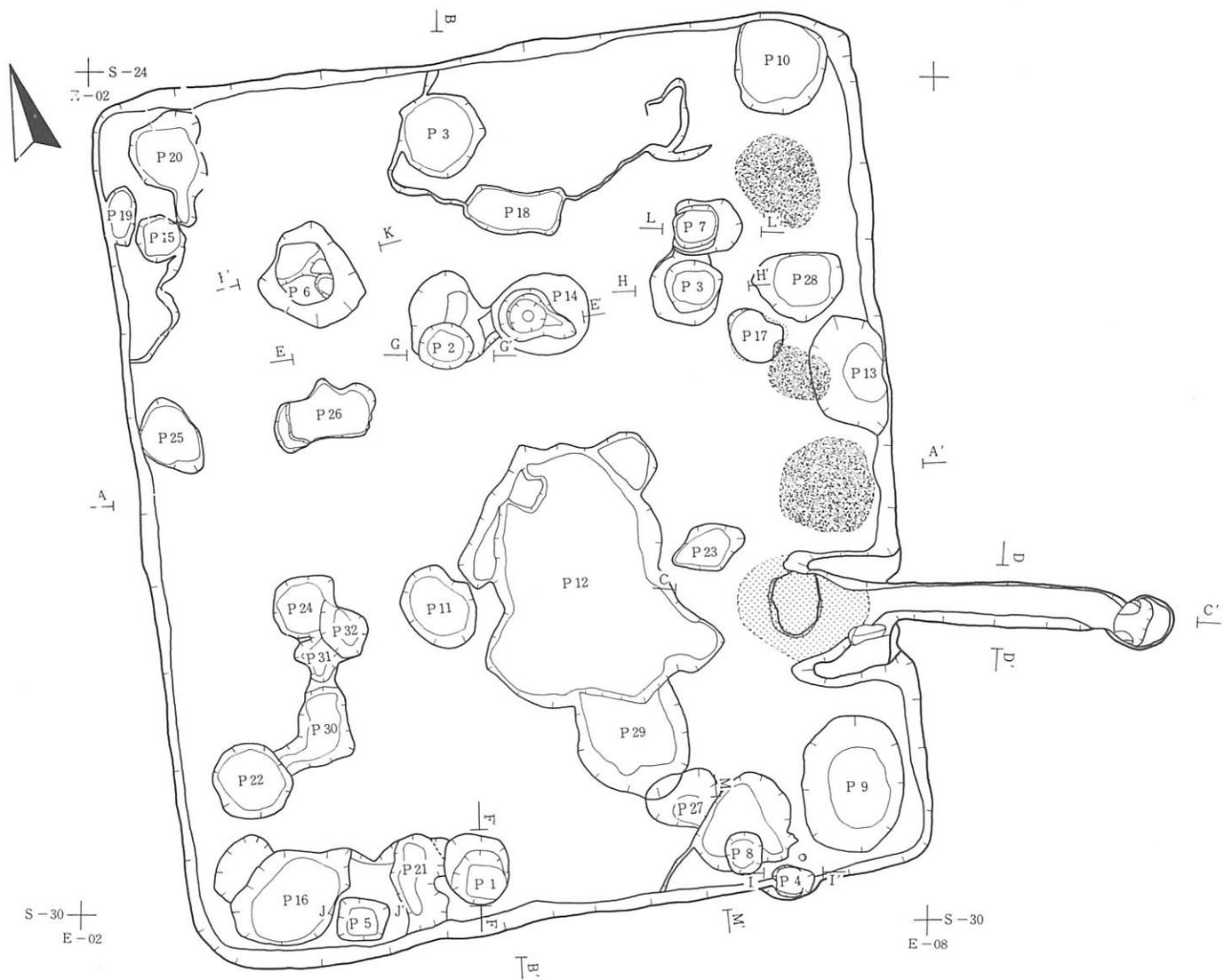
坏1（第6図1） 住居跡の北東隅、焼土下から出土したもので全器形の約 $\frac{1}{2}$ を欠損したものである。成形にロクロを用い、底部は回転糸切り無調整、体部は丸味をもって立ち上がり口縁部でわずかに外反する。復元実測で口径14.0cm、器高5.1cmを測る。調整は内黒処理を施し、体部上半にヘラミガキ痕を有するものである。

坏2（第6図5、図版6の3） 住居跡埋土内出土の坏で底部から口縁部までの約 $\frac{1}{2}$ を残存する破片を接合復元したものである。口径15.8cm、器高3.9cmを測り、前者に比べ浅形である。体部は丸味をもって立ち上がり口縁部でわずかに外反する。内外とも黒色処理がなされ、調整も内外にわたって丹念にヘラミガキが行なわれている。底部切り離し技法は不明、調整は手持ちヘラケズリが不定方向に全面に施こされている。

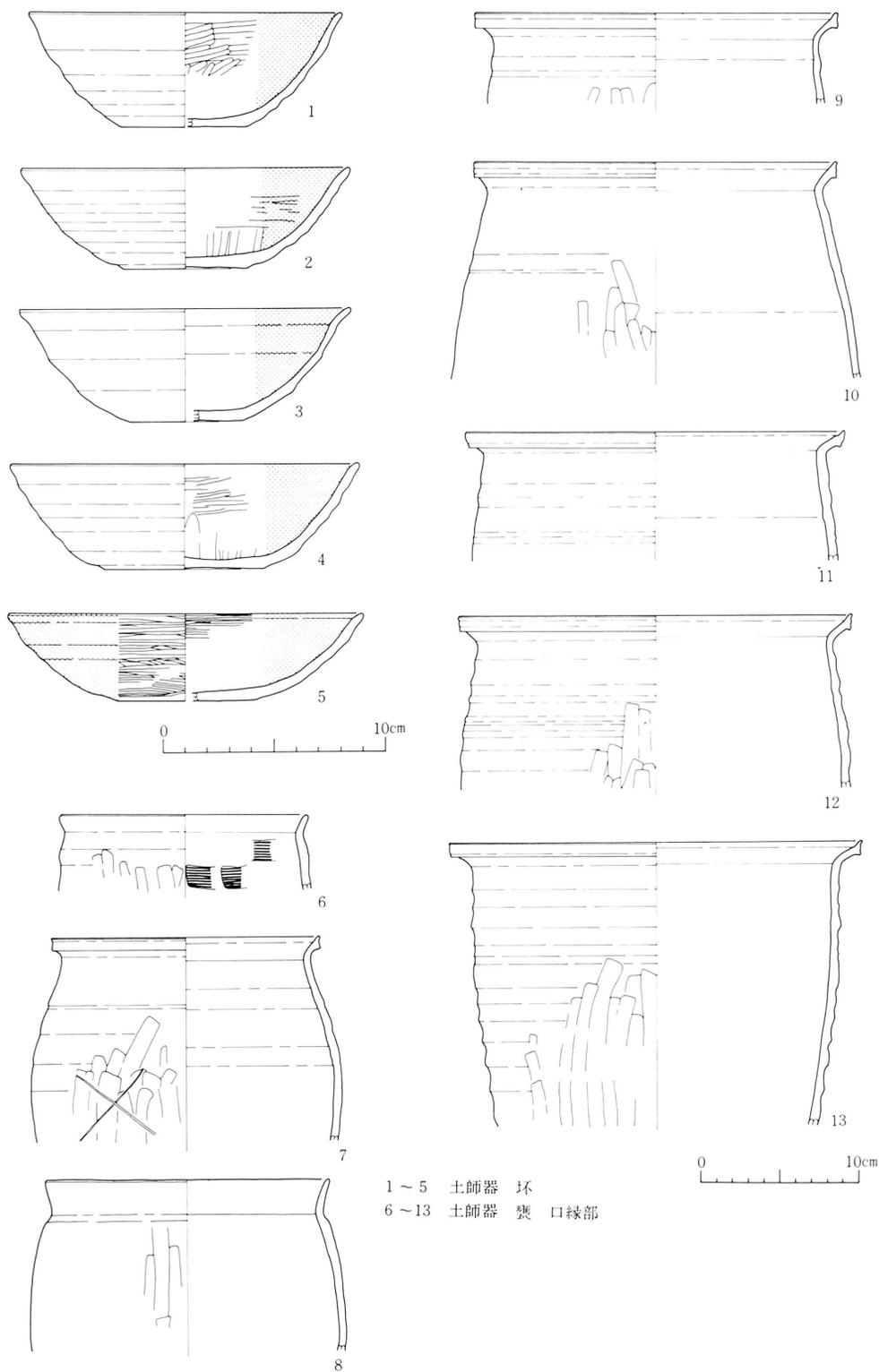
甕1（第6図6） 口縁部の約 $\frac{1}{2}$ を残存し、図上復元によったものである。成形に巻き上げ法をとり、口縁部付近はロクロ調整を行っている。口縁部は「く」の字状にわずかに外反。体部外面上半はヘラケズリが斜方向に、また内面はハケメ、ヘラナデなどによる調整がみられる。口径15.6cmを測りやや小形の甕である。

甕2（第6図7、図版7の1） かまど内出土、体部から口縁部の約 $\frac{1}{2}$ を残存する破片である。口径17cmを測る。成形にロクロを用い、最大径は胴部に求められる。口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部を上下に挽き出している。調整は体部外面に上下方向にヘラケズリ調整が施され体部中央付近に「×」印の筥がきかみとめられる。焼成は良好で黄白色を呈し硬質である。

甕3（第6図8、図版7の2） 住居跡埋土内出土の口縁部破片である。成形に巻き上げ技法をとり口縁部付近にロクロ調整の痕跡をとどめる。なお肩部に段を有し、口縁部は他の甕

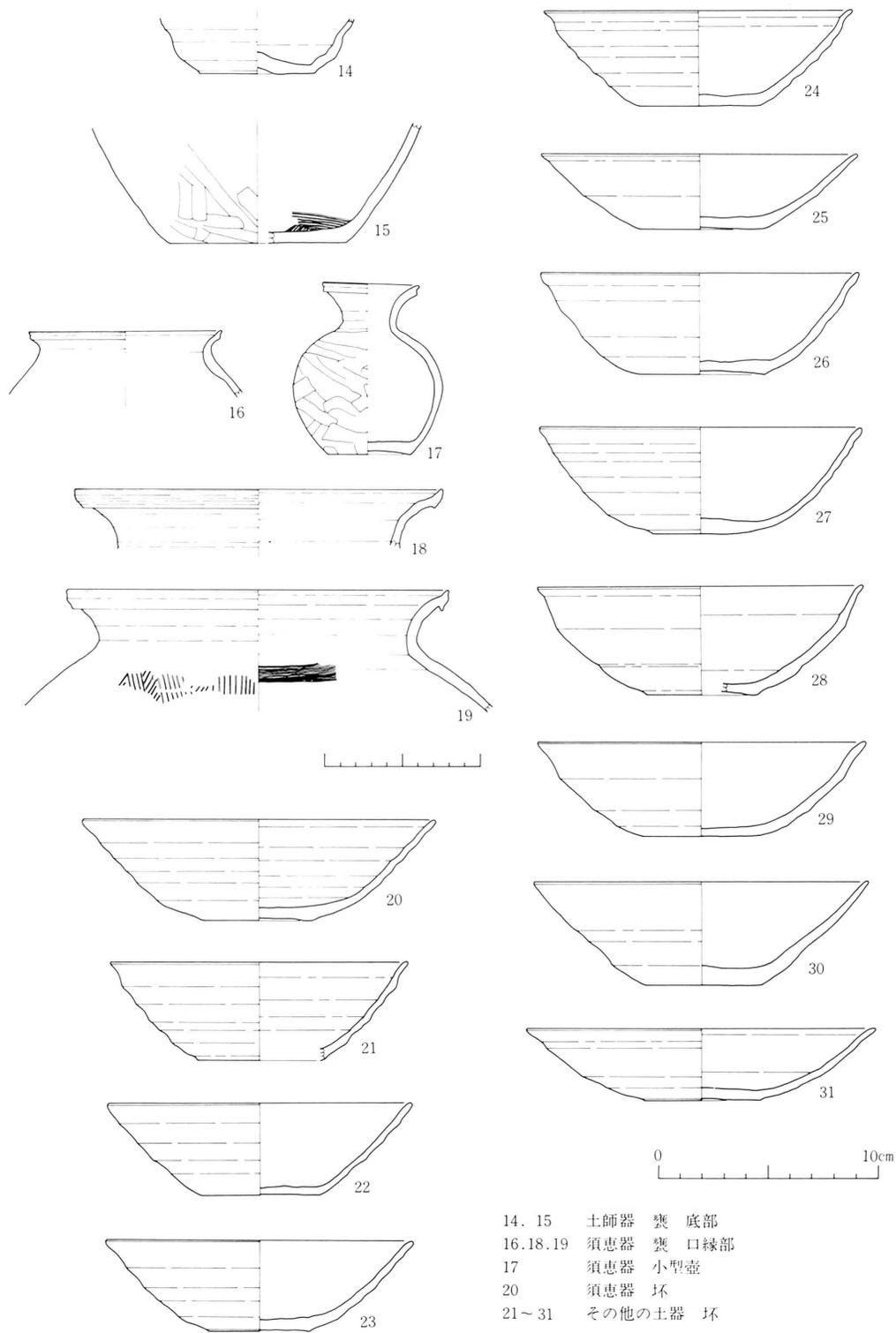


(第5図) C150住居跡平断面図



1 ~ 5 土師器 坏
6 ~ 13 土師器 甕 口縁部

(第6図) C150住居跡出土土器実測図



- 14. 15 土師器 甕 底部
- 16. 18. 19 須恵器 甕 口縁部
- 17 須恵器 小型壺
- 20 須恵器 坏
- 21~31 その他の土器 坏

(第7図) C I 50住居跡出土土器実測図

類に比べやや長い。体部外面は縦方向のヘラケズリ調整を施こし、器肌は荒れ気味で胎土中に石英の細砂を含み脆弱である。

甕4（第6図10、図版7の3） 埋土内出土の長胴甕口縁部破片、復元実測で口径23cmを測る。ロクロ成形で外面は胴部中央以下に縦、あるいは斜方向のケズリ調整を施している。器形では胴部にわずかにふくらみをもたせ、口縁部はほぼ直角に近い「く」の字状に外反する。口唇部は上下に挽き出されている。焼成は良好で硬く、胎土中に石英の砂粒を多く含んでいる。

甕5（第6図13） 埋土内出土の長胴甕口縁部及び胴部破片である。ロクロ成形で胴部にロクロ回転による波状の段をもち、胴部はややふくらみをもって立ち上がり口頸部で強く「く」の字状に外反する。口唇部は上下方向に挽き出される。調整は外面にヘラケズリが縦方向に施こされている。器肌は灰白色を呈し焼成は硬く良好である。

甕6（第7図15、図版7の6） 埋土内出土の甕底部破片である。底部径約7.4cmを測る。底部外面はヘラケズリ調整で、中心に「×」印の窠書きがみられる。胴部下半は縦、斜方向の粗いケズリが施こされ、底部内面に粗いハケメ痕が残り胴部下半に及び、焼成は良好で硬質である。

須恵器

坏1（第7図20） 住居跡の埋土中から出土、体部と口縁部の大半を欠損、口径16.1cm、器高4.6cmを測る。底部切り離しは回転糸切り無調整で色調は灰色を呈し、焼成は良好である。器形は体部の立ち上がりほぼ直線的に外傾し、口縁部に至る。全体に底径に比べ口径が大きく浅形である。

甕1（第7図16） 埋土内出土のもので口縁部と肩部約 $\frac{1}{4}$ を残存するものを復元実測した。胴部は丸味をもって立ち上がり口頸部で「く」の字状に外反する。口唇部は上方に挽き出され、口縁部が胴部に比べ小さくまとまっている。成形はロクロにより調整痕は内外ともみられない。外面肩部付近に蒼青色の自然釉がみられるが全体に灰色を呈し堅緻である。

甕2（第7図18） 煙出部付近の検出面から出土した甕の口縁部破片で口径23.6cmを測る。ロクロ成形で頸部でゆるやかに外反し、口唇部は上下に挽き出されている。色調は茶褐色を呈し、頸部以下に褐色の自然釉が薄くかかっている。

甕3（第7図19） かまど東南付近出土の甕の口縁部で、口径24.4cmを測る。残存部の形態から推測すると肩部の張りの強い大形甕と考えられる。口縁は頸部で強く外反し、口唇部が上下に強く挽き出されているが下方がより顕著である。調整は外面肩部付近に格子目の叩きを全面に施こしている。内面肩部にはヘラナデの調整がみられる。口唇部は巾1.3cmの縁帯となっており、外方にややふくらみをもっている。色調は暗茶褐色を呈し、頸部屈曲付近にわずかに自然釉を認める。

壺 1（第7図17、図版7の7） 住居跡ピット内出土の小形壺の完形品で器高10.9cmを測る。ロクロ成形で、底部は回転糸切りで無調整、外面は頸部以下全面にわたり横または斜方向に丹念なへラケズリ調整がなされている。頸部はやや外傾して立ち上がり口縁部がゆるやかに外反、口唇部はやや外傾して縁帯をつくり中央に0.4cmの巾で一条の凹線が一周する。色調は灰色を呈するが口縁から胴部下半にかけて黝灰色の自然釉がみられる。

その他の土器

坏 1（第7図21、図版6の4） ピット内出土の坏で口径13.9cm、器高4.2cmとやや浅形である。ロクロ成形で器内外面とも無調整で底部内面にロクロによる渦状の隆線が残る。体部はほぼ直線的に外傾し口縁部に至る。全般に磨減が著しく、色調は浅黄橙色を呈し軟質である。

坏 2（第7図24、図版6の7） 住居跡埋土内出土で約 $\frac{1}{2}$ を欠損している。体部はやや丸味をもって立ち上がり口縁部でわずかに外反する。底部は回転糸切りで調整は認められない。器面は内外とも磨減が著しい。

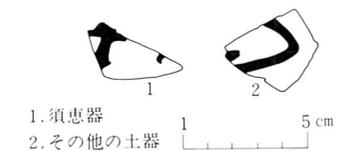
坏 3（第7図26、図版6の8） 住居跡埋土内出土で全体の $\frac{1}{2}$ を残存する。底部切り離しは、回転糸切りで内外ともに調整は認められない。体部はふくらみをもって立ち上がり口縁部はやや強く外反する。色調は灰白色を呈するが焼成は軟質である。

坏 4（第7図30、図版6の12） 煙道内出土の坏で約 $\frac{1}{2}$ を残存する。復元実測で口径15.2cm、器高4.7cmを測る。底部は回転糸切りの切り離しで体部は下半で内彎気味に外傾し以後直線的に外傾して口縁部に至る。器面は内外ともに磨減が著しい。

坏 5（第7図31、図版6の13） ピット12埋土中出土の坏で、全体の約 $\frac{1}{2}$ を残存する。復元実測で口径15.2cm、器高3.3cmを測る。器高が低く、立ち上がり角度も小さい。いわゆる皿形に近い坏である。底部は回転糸切りで内外面とも再調整は認められない。色調は茶色で部分的に剥落が認められる。

墨書土器

坏（第8図、1・2） 1は須恵器の坏破片であるが文字の大半を欠損し、判読はできない。色調は赤褐色を呈しているが須恵器のナマ焼きと思われる。2は上記の須恵器坏破片と類似するが小破片のため文字の判読はできない。



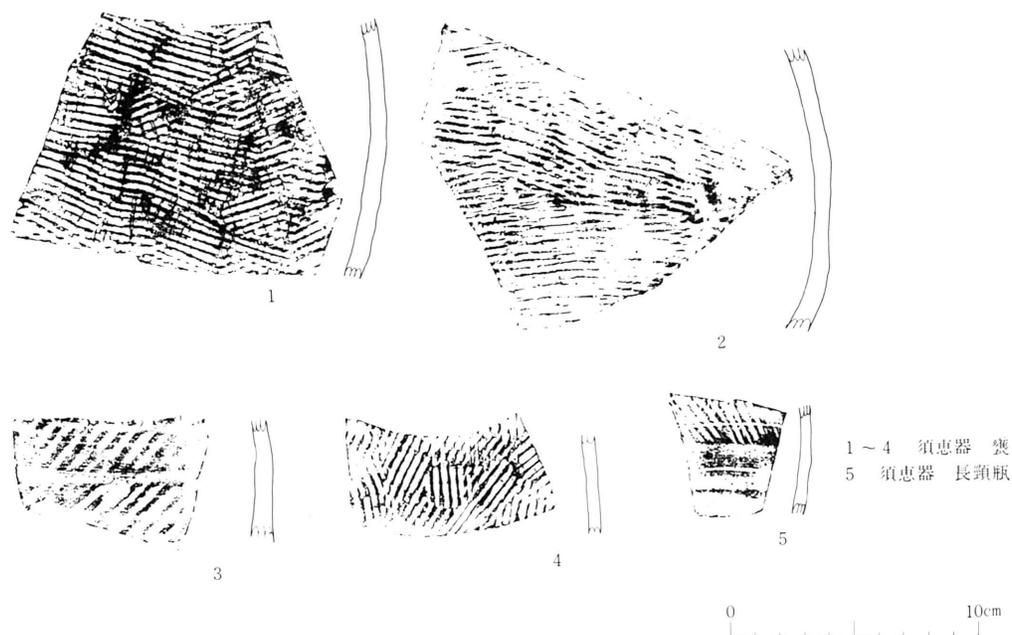
（第8図） C150住居跡出土墨書土器

破片からの観察（第9図1～5）

須恵器の甕、壺の破片観察から調整方法において二分類される。1類（1、2、5）は格子目の叩きを主体とするもので破片部位は甕の胴部付近とみられる。胎土は精良で焼成も堅緻で

ある。色調は概ね灰褐色を呈し、内面調整はあて工具の痕跡を消しナデによる調整が行われている。2はあて板の木目痕が明瞭に圧痕として残されている。1は内外に灰黒色の自然釉がみられる。2類は(3、4)で平行叩き目によるものである。3は広口壺の肩部付近の破片とみられる。上方にロクロによる調整痕がみられる。4は叩き目を一部擦り消す方法をとっている。

3の内面は平行叩き目の痕跡を残し、4はロクロ調整のみである。3は胎土が精良であるが4は細砂を多量に混入している。色調はいずれも灰色を呈し、須恵器独特の色調を帯びるものである。

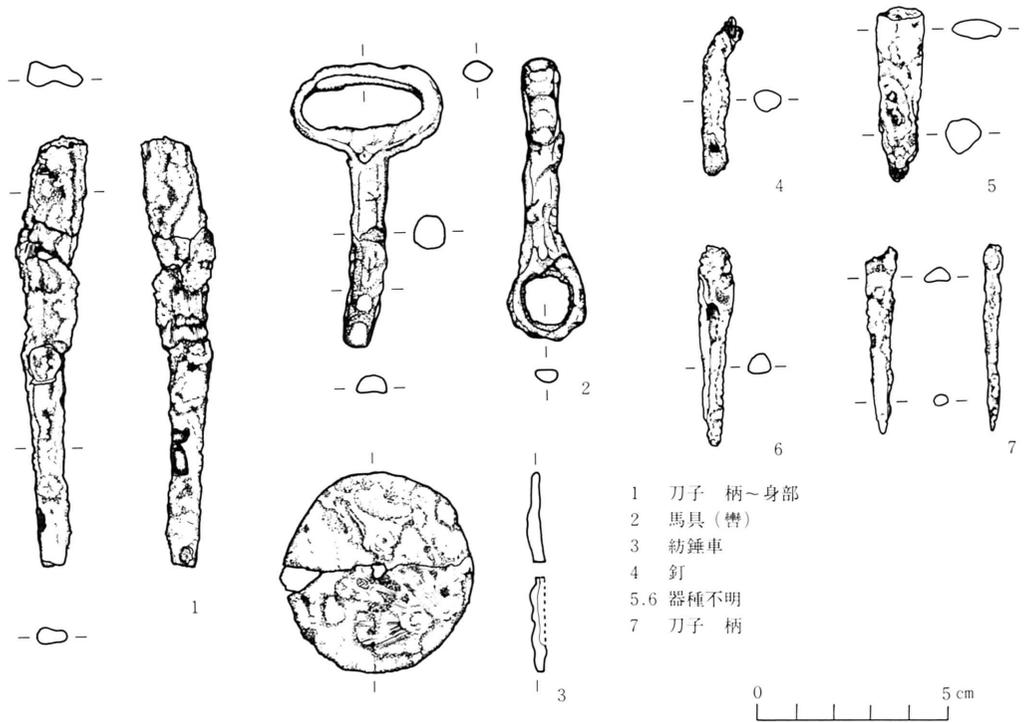


(第9図) C150住居跡出土土器拓影図

鉄器

1. 刀子 (第10図1、図版12の3・5) 住居内床面直上出土で残存長11.5cm、刃部最大巾1.5cmを測り断面は三角形を呈する。柄端部と刃部先端を欠損している。全体に腐蝕が著しく脆い。
2. 轡 (第10図2、図版12の4) 住居内床面直上で出土し、全長7.5cmを測る。両端に輪を有し形状は円形と楕円形で夫々異なる。両端の輪は向きを90度振った状態で轡の部品と思われる。
3. 紡錘車 (第10図3、図版12の1) 床面直上から出土し円盤部分のみ残存するものである。直径5.3cm、厚さ2mmを測り極めて薄い。円盤中心部に芯棒の痕跡と思われる穴が貫通している。穿孔の直径は約0.4cmである。酸化により腐蝕が著しい。
4. 釘状鉄製品 (第10図4~7、図版12の3) ピット埋土内、床面等から出土したものでいずれ

も一部を欠失し完形とは云えない。直線状のもの、捩れたものなどであるが断面は三角形ないし四角形に近い形のものである。



(第10図) C I 50住居跡出土、鉄製品実測図

のろ (図版12の6～9)

A 板状のろ 住居跡床面上に貼りつく形で出土、形状は不定形で面積は 100～200 cm²大のものである。接地面は平坦であるが表面は起伏が多く凹凸がはげしい。厚さは 0.2cm～ 1.0cmの間を測り極めて脆い。また表裏ともに木炭の板目の痕跡が明瞭な圧痕となって残されている。

B 塊状のろ 住居跡床面出土で量的に多い。形状は塊状で小は 1 cm大から大は約10cmを測るものまで様々である。表面に大小の小穴を有し凹凸が著しい。色調は概して茶褐色乃至黒褐色である。

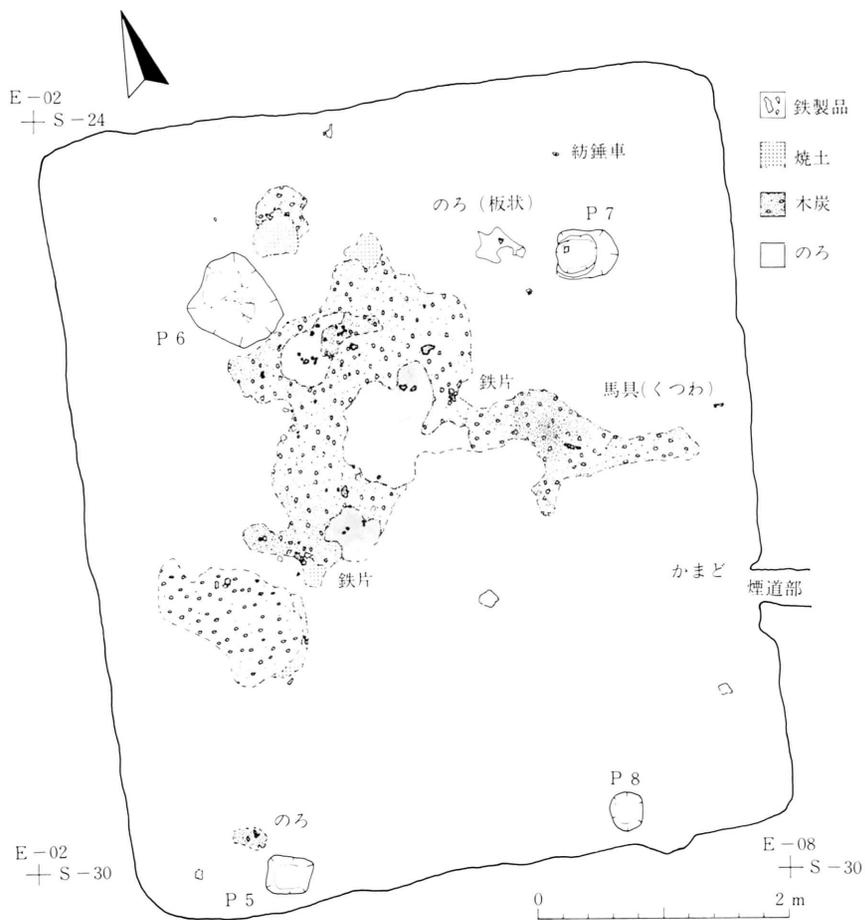
種子 (図版12の10)

1. **ノモモ** 床面出土で縦長 1.7cm、横巾 1.4cm、厚さ 1.1cm、重さ 1.7gを測る。色調は黒色を呈し光沢が強い。基部は丸味をもつが先端部は尖っている。体部の条は明瞭に残され色調等から自然炭化の可能性が大きい。

2. **ノモモ** 縦1.65cm、横巾1.35cm、厚さ0.95cm、重さ 1.3g、色調は黒褐色を呈し前者よりも光沢が強い。体部半面の $\frac{1}{2}$ を欠損する。条はやや浅く、炭化によりやや脆くなっている。内部

に胚珠を遺存する。

3. ノモモ 約半分を欠損。形状、色調は2に類似する。種子の厚さ 1.0cmを測る。



(第11図) C 150住居跡鉄器、のろ等出土状況図

C E 36住居跡（第12図、図版3）

本住居跡は、C A 50の基準点から南西方向に80mの地点で検出された。東北新幹線保守基地の区画内にあるが東側半分は用地外に伸びていたため地権者の承諾を得て遺構全体の調査を行った。また本住居跡西方27m地点を南北に東北本線が走っている。

【平面形】 南北 7.5m、東西 7.2mを測り、隅丸正方形プランを呈し、本遺跡中最大の規模のものである。

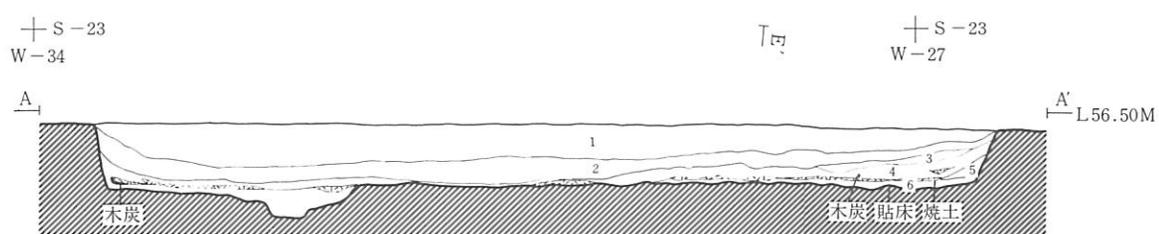
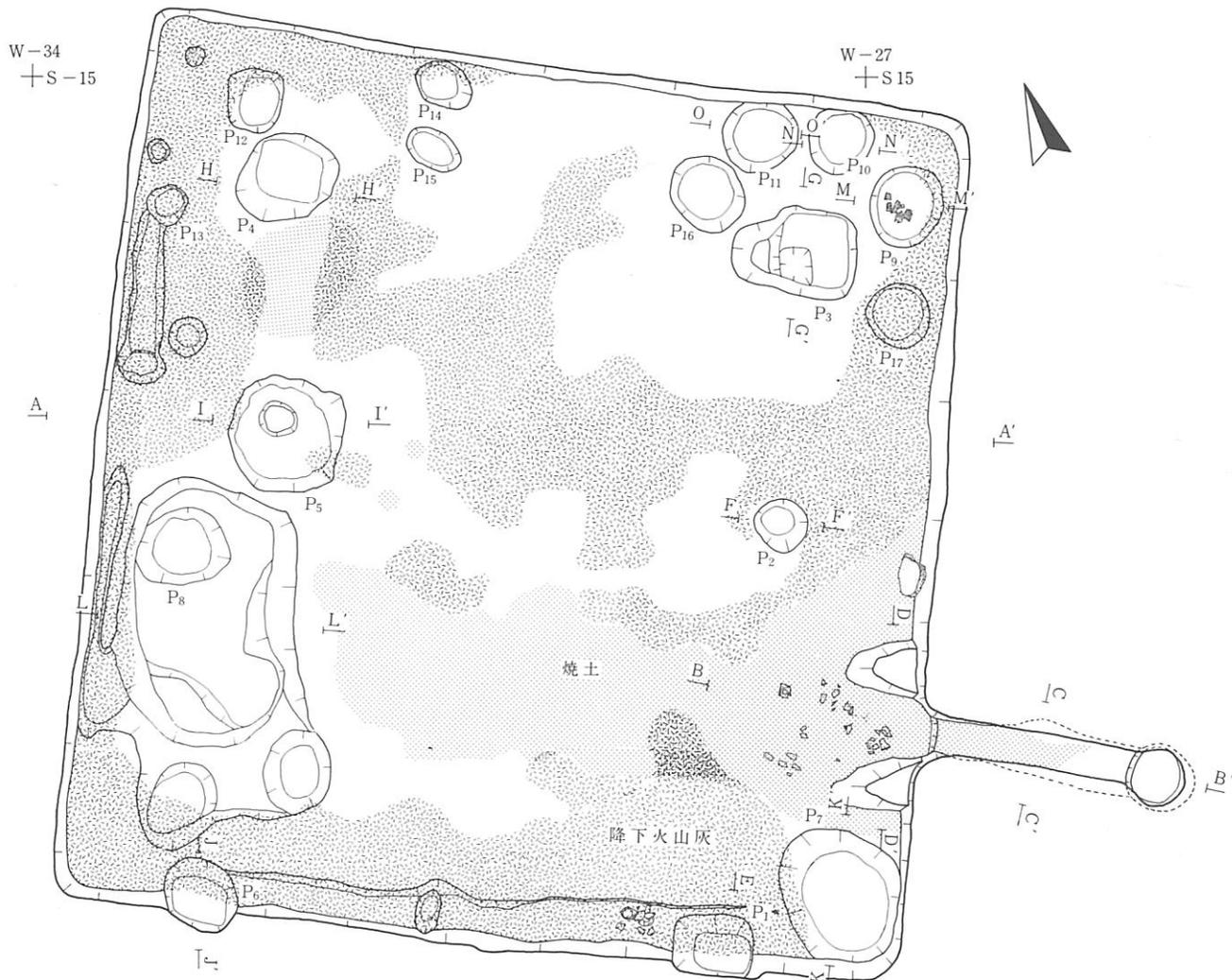
【埋土】 本住居跡の埋土は5層からなり、1層は黒色(7.5Y R $\frac{1}{2}$)土でしまりがあり、2層は黒褐色(7.5Y R $\frac{2}{2}$)土の色調を呈し、火山灰の粒子をわずかに混入している。3層は黒色(7.5Y R $\frac{2}{1}$)土で1層より黒味がやや増す。4層は降下火山灰を混入する層で、埋土がやや白っぽく、また混入物に木炭片、土器片などが検出されている。5層は住居跡の壁が崩壊し、堆積したものである。床面直上に降下火山灰の層が層厚2～3cmで堆積し、一方床面に焼土、木炭がレンズ状に部分的な広がりをみせている。

【壁】 東壁で35cm、西壁は約40cmを測り壁の傾斜角は25度前後となっている。南壁は約30cmを測り直下を約20cmの深さで周溝が周る。北壁は推定40cmと思われ、傾斜角は約10度と東西壁に比べきつい。

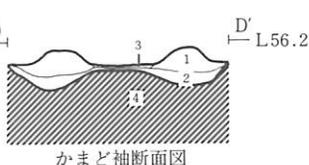
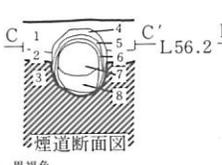
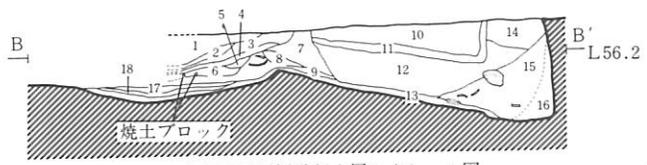
【床面】 床面はシルトをベースに黒褐色土を混入した貼り床である。住居跡の中央部が固くふみ固められており、周囲に厚く、中央部に薄い傾向にある。貼床の層厚は周辺部で5～8cm中央部で2～3cmを測る。この貼床面上に前述の降下火山灰の堆積が広範にわたり認められる。また床面が焼土化している部分は東壁、かまど焚口部、西壁の一部にかけ巾約1mの帯状となって広がっている。

【周溝】 部分的に周溝施設が設けられている。南壁寄りに一条、西壁直下に2条を検出した。前者は上端巾35～40cm、下端巾20～30cmを測る。深さは20cm前後である。後者は狭少で深さ12～13cmとやや浅い。なおこれらは床面を一周するものではない。

【ピット】 本住居跡の床面上に計24個のピットの検出をみた。ピット1から6までが柱穴で、うち2、5は補助住穴と考えられる。主住穴は掘り方を伴い、平面形は隅丸方形を呈している。一方補助柱穴は円形で小形である。ピット7は貯蔵穴であろう。規模は長径1.2m、短径1m、深さ40cmを測り、断面形は浅鉢形を呈する。埋土は5層から構成され、1層は暗褐色の降下火山灰、2層は灰白色の降下火山灰をレンズ状に推堆している。3層は薄層で木炭の粒子を混入し、4層は焼土層、5層は暗褐色でシルトをブロック状に混入している。この層には火山灰の小粒子が入りこみ他に炭化物、焼土及び土器片などを包含する遺物包含層である。ピット8は西壁寄りに位置しピット群中最大である。長径2.3m、短径1.4m、深さ50cmを測る。埋土は6層に分けられるが第3層が降下火山灰の層で灰白色を呈している。遺物包含層は第6層で、



1. 黒色(7.5Y R 3%)
2. 黒褐色(7.5Y R 2%)火山灰の粒子を若干混入
3. 黒色(7.5Y R 2%)1層よりやや黒味を増す
4. 灰白色(5Y R 5%)降下火山灰層 木炭片、土器片混入
5. 半明褐色(7.5Y R 5%)に黒褐色(7.5Y R 2%)の混入土層
6. 明褐色(7.5Y R 5%)地山、シルト

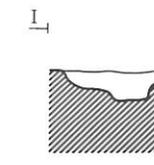
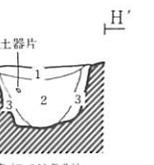
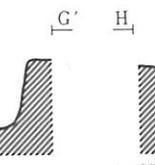
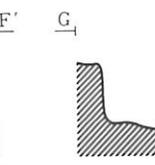
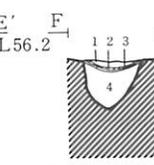
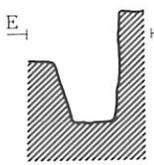


・かまど及び煙道部土層セクション図

1. 黒褐色土(7.5Y R 2%)
2. 黒褐色土(7.5Y R 2%)
3. 黒褐色土(7.5Y R 2%)
4. 黒褐色土(7.5Y R 2%)
5. 黒褐色土(焼土混入)
6. 褐色土(遺物包含)
7. 明赤褐色土(2.5Y R 5%)
8. 焼土、ブロック状混入
9. 明褐色土(7.5Y R 5%)
10. 黒褐色土(7.5Y R 2%)
11. 煙道の加熱で焼土化
12. 暗褐色土(7.5Y R 2%)
13. 煙道の加熱で焼土化
14. 黒褐色土(7.5Y R 2%)
15. 黒褐色土(7.5Y R 2%)
16. 15に焼土混入
17. 暗褐色土(7.5Y R 2%)
18. 明赤褐色土(2.5Y R 5%)

1. 黒褐色
2. 薄移層
3. 地山の熱をうけ焼けている
4. 煙道の熱をうけ焼けている
5. 固く焼けている部分
6. 煙道の内壁で焼けているがススの付着もある
7. 煙道の埋土
8. 壁の崩壊土、焼土等も混入

1. 地山のシルトと焼土、黒褐色土の混入土
2. 黒褐色土に地山のシルトが混入
3. 明赤褐色(2.5Y R 5%)
4. 地山



1. 暗褐色(10Y R 5%)
2. 灰白色(5Y R 5%)降下火山灰
3. 炭の層
4. 黒褐色のよごれ土

1. 暗褐色(7.5Y R 2%)火山灰を小粒子状に混入
2. 炭化物の多い層
3. 灰白色(5Y R 5%)降下火山灰
4. 炭化物がブロック状に混入
5. 4に焼土が粒子状に混入
6. 遺物包含層

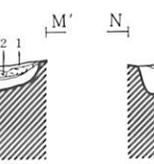
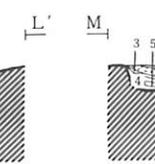
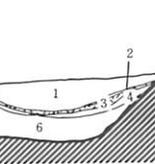
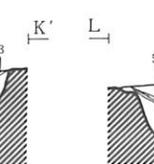
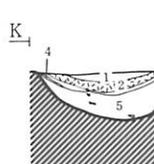
1. 暗褐色(7.5Y R 2%)
2. 暗褐色(7.5Y R 2%)火山灰
3. 炭化物、焼土若干混入
4. 暗褐色(7.5Y R 2%)にシルト混入

1. 暗褐色(10Y R 5%)
2. 灰白色(5Y R 5%)
3. 炭の層
4. よごれ土
5. 炭化物、土器包含

1. 暗褐色(10Y R 5%)
2. 灰白色(5Y R 5%)
3. 炭の層
4. よごれ土
5. 炭化物、土器包含

- P9に同じ

- P9に同じ



1. 暗褐色(10Y R 5%)
2. 灰白色(5Y R 5%)降下火山灰
3. 炭の層
4. 黒褐色のよごれ土
5. 黒褐色、土、炭化物、土器片混入

1. 暗褐色(7.5Y R 2%)火山灰を小粒子状に混入
2. 炭化物の多い層
3. 灰白色(5Y R 5%)降下火山灰
4. 炭化物がブロック状に混入
5. 4に焼土が粒子状に混入
6. 遺物包含層

1. 暗褐色(10Y R 5%)
2. 灰白色(5Y R 5%)
3. 炭の層
4. よごれ土
5. 炭化物、土器包含

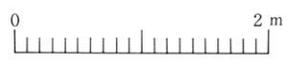
1. 暗褐色(10Y R 5%)
2. 灰白色(5Y R 5%)
3. 炭の層
4. よごれ土
5. 炭化物、土器包含

- P9に同じ

- P9に同じ

- P9に同じ

(第12図) C E 36住居跡平断面図



炭化物、焼土等を若干混入するが性格は不明である。

〔かまど〕 かまどは東壁に付設されやや南に偏る。構築は袖部分を一旦掘り込み、その中に黒褐色土と地山のシルトの混合土をもって固めその上に断面形が台形状に地山シルトを用いて構築してある。袖部分の補強材は検出できなかった。煙道は壁から外方に伸び壁端からの長さ2.2m、巾40cmを測る。煙出しはほぼ垂直に立ち上がり、上端径約40cm、下端で55cmを測る。煙道は傾斜角約15度で下降し煙出部へ接続する。かまどの焚口部は地山層を浅鉢状に約15cmほど掘りくぼめている。層位は3層からなる。かまど周辺には径約1mの範囲に焼土及び土器片が集中的に出土した。煙道部の基部で土師器坏の底部破片を2個、末端部で7片、煙出し部でも同数の出土をみている。

〔遺物出土状況〕 遺物はかまど付近、東南コーナー付近、南西コーナー付近、北西コーナー付近及び東壁中央付近に集中して出土している。全般に壁に偏在する傾向をみせている。なお炭化材はピット9から原形をよくとどめて出土している。

〔考察〕 本住居跡は大形の住居跡で柱穴は6本を数える。柱穴の位置は南壁に偏在し、C I 50住居跡と酷似する。この住居跡は床面にかなり広範囲にわたって焼土の分布が認められた。また壁全面が焼土化し中でも東壁と南壁はかなりの熱を受けたものと思われる。このことは本住居跡が焼失家屋であり、焼失によって廃絶されたものであろう。また埋土内や、床面上に炭化材のほとんどみられないことは完全焼失の可能性を伺わせるものである。本住居跡の遺物検出状況をみると床面直上に圧倒的に多く、埋土内出土点数を上回っている。これは焼失後廃棄され自然埋没したものと考えられる。埋没は自然堆積でいずれの埋土もレンズ状の土層を形成している。ピット等の埋没が進行する中で火山灰の降下があり、ピットの上層、床面直上でこれの層が検出された。

〔出土遺物〕 (第15～19図、図版8～11)

本住居跡は焼失家屋であることから遺物の保存状態が良く、また大型住居跡という点からも遺物の出土点数は他の2住居跡に比べかなりの量に達している。出土地点は床面直上が圧倒的に多く、土器では土師器の坏、高台付坏をはじめ小形甕、大形甕などであり、須恵器は坏、甕、小形壺、大形壺、長頸瓶、その他の土器では坏類を出土している。

〔土師器〕

坏1 (第15図1、図版8の1) かまど付近出土の小形坏で底部の一部から体部、口縁部にかけて約 $\frac{1}{3}$ を残す破片である。復元実測で、口径12.6cm、器高4.1cmを測る。体部はほぼ直線的

に外傾し、口縁部が内彎する特異な器形を呈している。内外黒色処理を施し、内面に横方向の入念なへらミガキが、また体部外面はやや粗い縦方向のへラケズリ調整がみられる。口縁部付近は磨滅により調整は不明である。体部外面は黒色処理が剥落し、部分的に赤褐色の胎土をのぞかせている。

坏2（第15図2） かまど焚口部付近出土の内黒杯の破片で口径13.2cm、器高 4.4cmを測る。体部は丸味をもって立ち上がるが、口縁部付近で器厚が極端に薄くなり強く外反する。器面調整は体部上半内面に横方向のへラナデ痕を有する。

坏3（第15図3、図版8の2） かまど内出土の坏、内黒処理が剥落してほとんど痕跡をとどめないほどである。残存部約 $\frac{1}{2}$ をもとに復元実測した。計測値は口径13.8cm、器高 4.8cmで体部内面に横方向のへラナデ痕を認める。体部は底部付近で外方にふくらみを見るがその後直線的に外傾し口縁部に至る。

坏4（第15図4、図版8の3） 床面直上の降下火山灰下層から出土したもので $\frac{1}{2}$ を欠損している。口径14cm、器高 4.3cmを測り内黒処理を施している。体部内面にへらミガキが横方向になされ、底部の調整痕は判然としない。底部切り離し技法は不明である。切り離し後手持ちへラケズリ調整を行っているが体部下半までは及ばない。

坏5（第15図9、図版8の7） 住居南壁の溝埋土内から出土した内黒坏でほぼ完形に近いものである。口径14.6cm、器高 4.7cmを計測し外面の器肌やや磨滅がみられるが保存状態は良好である。成形にロクロを用い、底部は回転糸切りの切り離しで内面調整は口縁部と体部中央辺で巾の狭いへらミガキが横方向に丹念に認められる。体部下半は横方向のへらミガキ後縦方向の巾広いへらミガキを加えている。底部内面は放射状のへらミガキが入念に施されている。器形は底部からふくらみをもって立ち上がるがその後は直線的に外傾し口縁部でわずかに外反する。

坏6（第15図10、図版8の8） かまど内出土の坏で全体の $\frac{1}{2}$ を残存する。復元実測の結果、口径14.9cm、器高 5.1cmを測り内黒である。内面は横方向にやや巾広のへらミガキを施し、底部は放射状を認めるが明瞭とはいえない。外面の調整はみられない。器内外とも二次加熱を受けて再酸化し赤褐色を呈している。器壁はゆるやかに内彎しながら外傾し、口唇部はほぼ直線的に終熄する。

坏7（第15図15） 床面出土の内黒破片、法量は口径16cm、器高 5.1cmを測りやや大形の坏である。器壁は内彎気味に外傾するが体部中央付近で内彎度が弱まり、以後ゆるいカーブを描いて口縁部に至り外反する。外面は無調整で内面は口縁部周縁に横方向のへらミガキがまわり、底部に放射状へらミガキがみられる。なお口縁から体部にかけてカーボンの付着が著しい。底部は回転糸切りによる。

坏8（第15図16、図版9の1） 煙出部出土の完形大形坏で、口径16.3cm、器高5.1cmを計測、体部はほぼ直線的に外傾し、口縁部でわずかに外反する。内黒坏で口縁部から体部中央にかけてやや巾の広いヘラミガキをまた底部から体部下半には放射状のミガキを用いている。底部外面は回転糸切りで調整は認められない。体部外面中央に墨書文字が認められるが上部が消滅し判読できない。

坏9（第16図17） 住居跡埋土中から出土した内黒坏口縁部破片である。法量は口径16.6cm、残存部器高3.8cmを測る。器形は浅形で立ち上がり角が小さい。口縁部内側に横方向のヘラミガキ痕を認めるが判然としない。体部外面にロクロ回転による巾1.5cmのハケ目痕が斜位に走る。

坏10（第16図19） 住居跡埋土内出土の内黒坏の口縁部破片である。図上復元で口径22cmを測る。口縁部に横方向のヘラミガキが認められるが、体、底部は磨滅が著しく、調整痕は不明である。器肉は薄くまた体部の立ち上がりはわずかに内彎しながら外傾する。

坏11（第16図20） ピット埋土内出土の内黒坏底部破片である。内面に不定方向のヘラミガキ調整がなされているが判然としない。底部外面は切り離した後、手持ちヘラケズリで調整がなされ一部は体部下端まで及ぶものである。底部外周のケズリ方向は右回りである。

高台付坏12（第16図21） ピット内出土の高台付坏で脚部と体部の一部を残存する。内黒処理がなされているが磨滅により調整は不明である。成形は脚部と坏部を夫々別個に作り接合したもので坏外底部に回転糸切痕を残している。高台脚部高は1.5cmを測り脚部断面は「ハ」の字状に外方に開脚する。坏部は全体に丸味をもって立ち上がり口縁部がゆるやかに外反する。

甕1（第16図23） 住居跡床面直上出土の小形甕である。残存部は口縁と体部上半のみで、法量は口径13.4cm、最大部位を胴部にもつ。口縁部は強く「く」の字状に外反し、口唇部は上方に挽き出されている。器面は二次加熱をうけ酸化し赤褐色を帯びており全体に剥落が顕著である。

甕2（第16図24） ピット内出土の口縁部破片である。図上復元で口径15.6cmを計測した。ロクロ成形で薄手作り、口縁部は内側に折り曲げられ特異な形態を示す。調整痕はなく、色調は浅黄橙色を呈している。焼成は良好で硬質である。

甕3（第16図25） 住居跡埋土内出土の口縁部破片で成形は巻き上げ法によるが口縁部はロクロ成形である。外面は体部上半にヘラケズリを施しているが他は欠損のため不明。内面は口縁部がヘラナデ、体部上半はヘラケズリ調整である。口縁部は短く、ゆるい「く」の字状に外反する。

甕4（第17図33） ピット8埋土内出土の口縁部破片、口径27.8cmを測るやや大形の甕である。成形にロクロを用い、器厚は薄い。外面はロクロ調整による凹凸がみられる。口縁部は強

く外反し、口唇部は上下に挽き出されている。体部外面の調整はへラケズリでやや斜方向に上から下にケズリ下している。内面の調整は認められない。

甕 5（第17図34、図版10の5）ピット2埋土内出土の小形甕で体部から底部を残存するものである。ロクロ成形で底部は静止糸切りによる。外面はロクロによる凹凸が顕著であり調整痕が内外面ともみられない。器形は底部から丸味をもって立ち上がる。器厚は極めて薄く体部中央付近では2mm弱を計る。色調は灰白色及び浅黄橙色を呈し焼成は良好で胎土は堅緻である。

甕 6（第17図37、図版10の6）住居跡南壁下の溝埋土内出土の甕底部破片である。平底で調整はへラケズリ、胴部下半に縦及び横方向のへラケズリ調整が行なわれている。内面は体部下端に横方向のハケ目が強いタッチでなされ底部は指ナデによる調整がみられる。全般に厚手の作りで胎土は軟質となっている。

甕 7（第17図40、図版10の8）かまど付近出土の小形甕で全体の約 $\frac{1}{3}$ を欠損する。復元実測により口径12cm、底部径6.2cm、器高7.6cmを計測した。ロクロ成形で底部からの立ち上がりは外彎気味に外傾し、胴部下半からは内彎しながら直立する。口縁部は短かく「く」の字状に外反する。口唇部は上方に挽き出される。底部は回転糸切りの無調整である。

甕 8（第17図42、図版11の2）かまど付近出土で $\frac{1}{2}$ を欠損する。復元実測で口径15cm、底径9cm、器高26cmを計測する。ロクロ成形で底部はへラケズリ調整を行ない、胴部全体に縦方向のへラケズリ調整を施こしている。一方肩部から口縁部はロクロ調整のみである。器形は胴張り型の長胴甕で最大径を胴部にもつ、口縁部は「く」の字状に外反し、口唇部は上下に挽き出されている。胎土は赤橙色を呈し口縁部付近は二次加熱により赤変している。また底部内面にカーボンの付着が認められる。

須恵器

坏 1（第17図43、図版9の3）住居跡溝埋土内出土の坏で底部の一部を欠損している。口径13.8cm、器高3.8cmを測る。底部切り離しは回転糸切りの無調整である。器形は、体部がわずかに内彎気味に外傾し口唇部も若干の外反傾向をみせる。また器面の調整はみられず、ロクロ回転による凹凸だけが顕著である。

坏 2（第17図44、図版9の4）かまど付近出土、 $\frac{2}{3}$ を欠損している。底部は回転糸切りの切り離しで一切の調整は認められない。器形は底部からゆるやかに外傾し、口縁部で強く外反する。焼成、色調ともに良好で灰褐色を呈し硬質である。

坏 3（第18図49、図版9の6）ピット埋土内出土の完形品で、ロクロ成形で内外面とも調整はない。器形は体中央部にふくらみをもたせ口縁部は外反する。口径16cm、器高4.6cmを測りや、大形である。体部に墨書がみられ「寺」と判読できそうである。一方外底部に「×」印の篋書きが認められる。

長頸瓶 1（第18図52、図版11の4） 住居跡埋土内出土で全器形の約半を欠損する。成形にロクロを用い底部はロクロ回転による調整がみられ低い高台となっている。体部外面はヘラケズリ、またはヘラナデの調整痕が残る。肩部は張りがなくゆるやかに立ち上がり口頸部は外彎気味に若干外傾しラッパ状に開く、口唇部は上下に挽き出され縁帯が一周する。色調は灰褐色を呈しているが自然釉はみられない。

甕 1（第18図53、図版11の5） 口径19.2cm、器高35.7cmを計測するほぼ完形に近い甕である。ロクロ成形により最大径を胴部にもつ、器形は底部から内彎して立ち上がり胴部のふくらみがわりあい強く全体が逆卵形を呈している。口縁部は「く」の字状に外反し口縁部に至る。口唇部はほぼ直立気味の縁帯がまわり上下にわずかに挽き出されている。調整は口縁部に斜方向のタタキ目が一様に施こされ、肩部に達している。肩部付近はタタキ目のあとロクロ回転によりわずかに擦り消している。胴部上半から底部にかけてヘラケズリが行なわれ、上半では特にタタキ目調整のあとヘラケズリで再調整を行った形跡をとどめる。焼成は良好で灰褐色を呈するものである。

その他の土器

坏 1（第18図54、図版9の7） 住居跡内ピット7埋土中出土のもので約半を欠損する。復元実測で、口径14.2cm、器高5.2cmを計測する。底部から口縁部にかけて丸味をもって外傾し、口唇部は先細りとなり終熄する。底部は回転糸切り無調整であるが外周部分に長さ1cm弱の擦痕が20条前後みられる。

坏 2（第18図55、図版9の8） ピット2埋土内出土の完形坏、法量は口径14.5cm、器高4.6cmを計測できた。器形に若干の歪みがみられるが底部から口縁にかけや、丸味をもって立ち上がり口縁部は強く外反する。内外面とも調整はみられず、底部は回転糸切りである。器肌は荒れ気味で石英の小礫を胎土中に含んでいる。色調は茶褐色を呈しや、脆弱である。

坏 3（第19図58、図版9の10） ピット8埋土内出土でほぼ完形である。口径15.3cm、器高5.5cmを計測する。体部中央付近で逆「く」の字状に内彎し、口縁部は「く」の字状に外反する。底部は回転糸切りの切り離し、底部内面はロクロ回転による渦状の隆起文が顕著に残っている。

坏 4（第19図60） 口縁部破片である。ロクロ成形で体部はわずかに内彎気味に外傾する。器厚は極端に薄く、器面の磨滅は著しい。色調は浅黄橙色を呈し極めて脆い。

坏 5（第19図61） 床面直上出土の口縁部破片である。成形は前者に共通するが体部外面にロクロによる凹凸がのこる。体部はほぼ直線上に外傾し、口縁部でわずかに外反する。色調は浅黄橙色を呈し胎土は脆弱である。

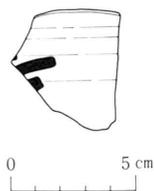
墨書土器

坏 1（第13図） 須恵器坏の破片で住居内埋土中から出土したものである。ロクロ成形で焼

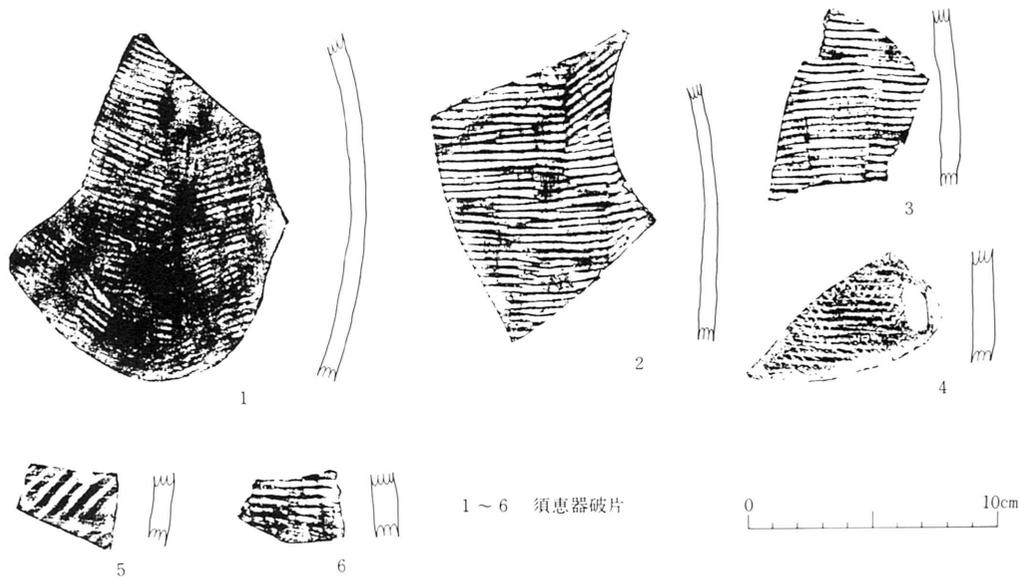
成はあまく、「ナマ焼き」の感を受ける。破片左端に判読不明の墨書が認められる。胎土は緻密であるがや、軟質の傾向にある。

須恵器片拓影図（第14図）

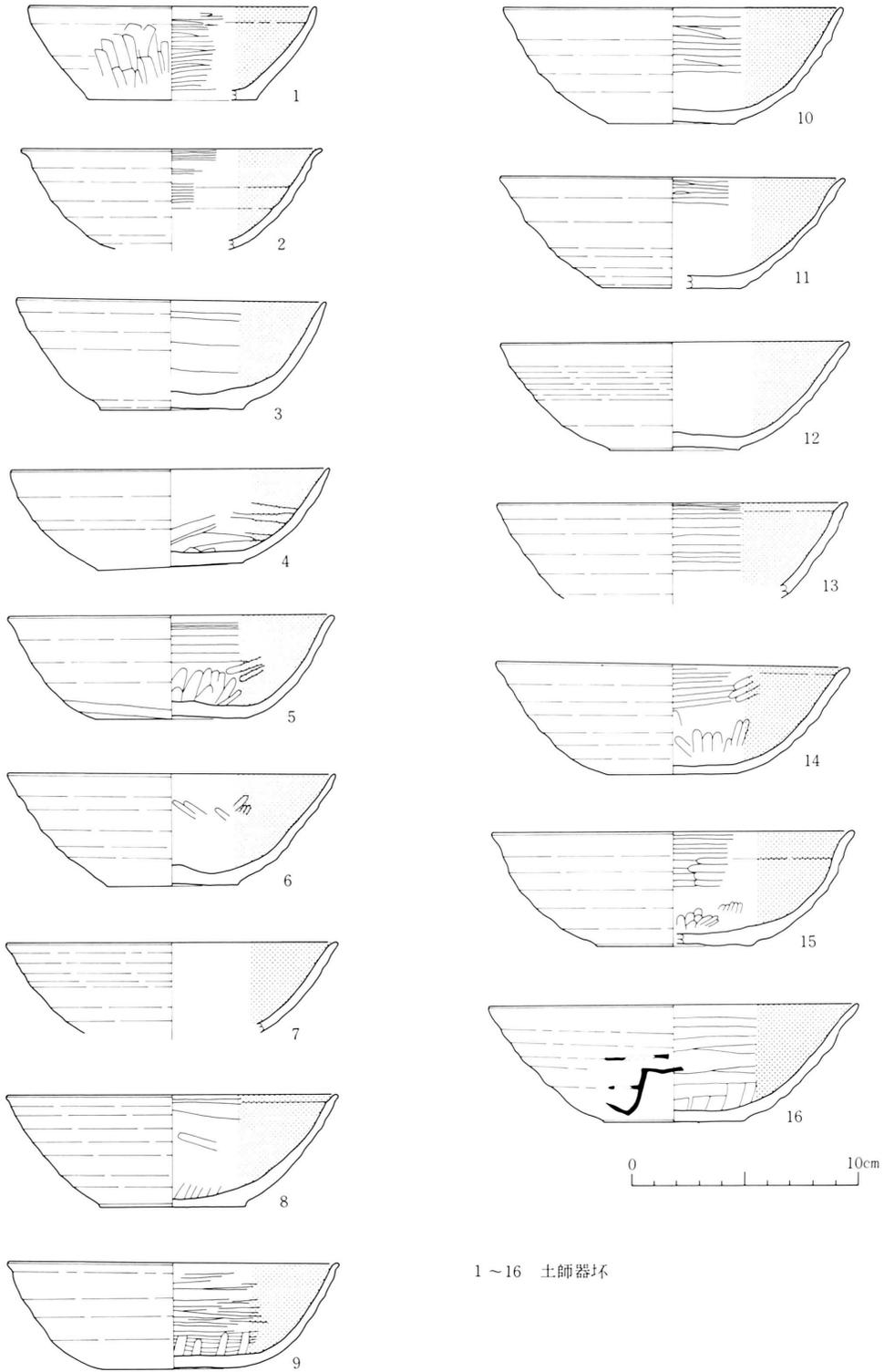
本住居跡出土の須恵器のうち主なものを拓本とした。I C 50住居跡同様器面調整に特異なものはなく、平行叩き目、格子目、平行叩き目の交錯するものの三種類に区分される。胎土は概ね精良で焼成もよく堅緻である。図版9は壺の底部付近の破片と推測されるが前記の調整はみられず、内外面とも「ヘラ状工具」によるケズリ調整を行ったものである。図版10は叩き目が網目状を呈し他とや、趣きを異にするものである。



（第13図）C E 36住居跡墨書土器

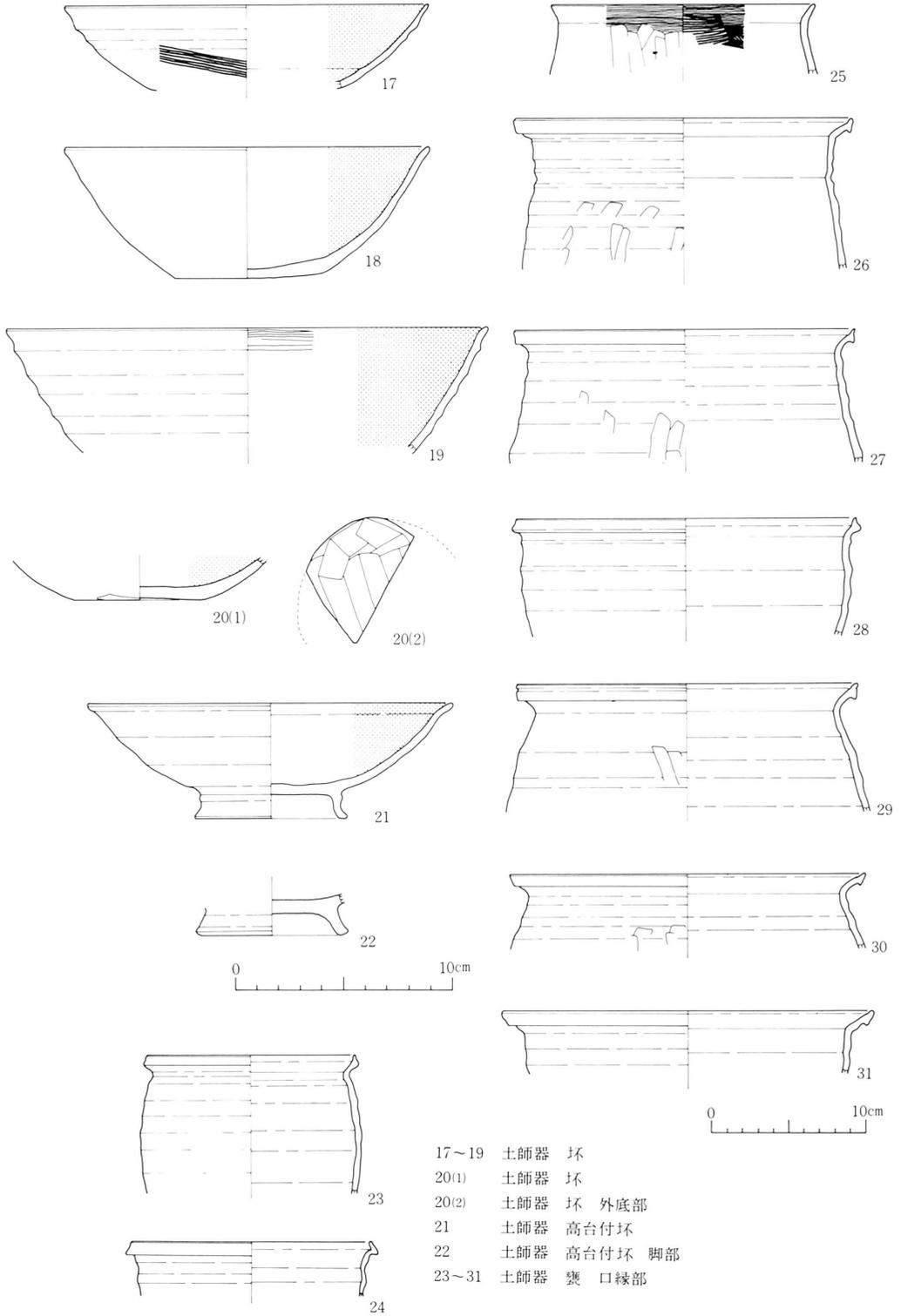


（第14図）C E 36住居跡出土土器拓影図



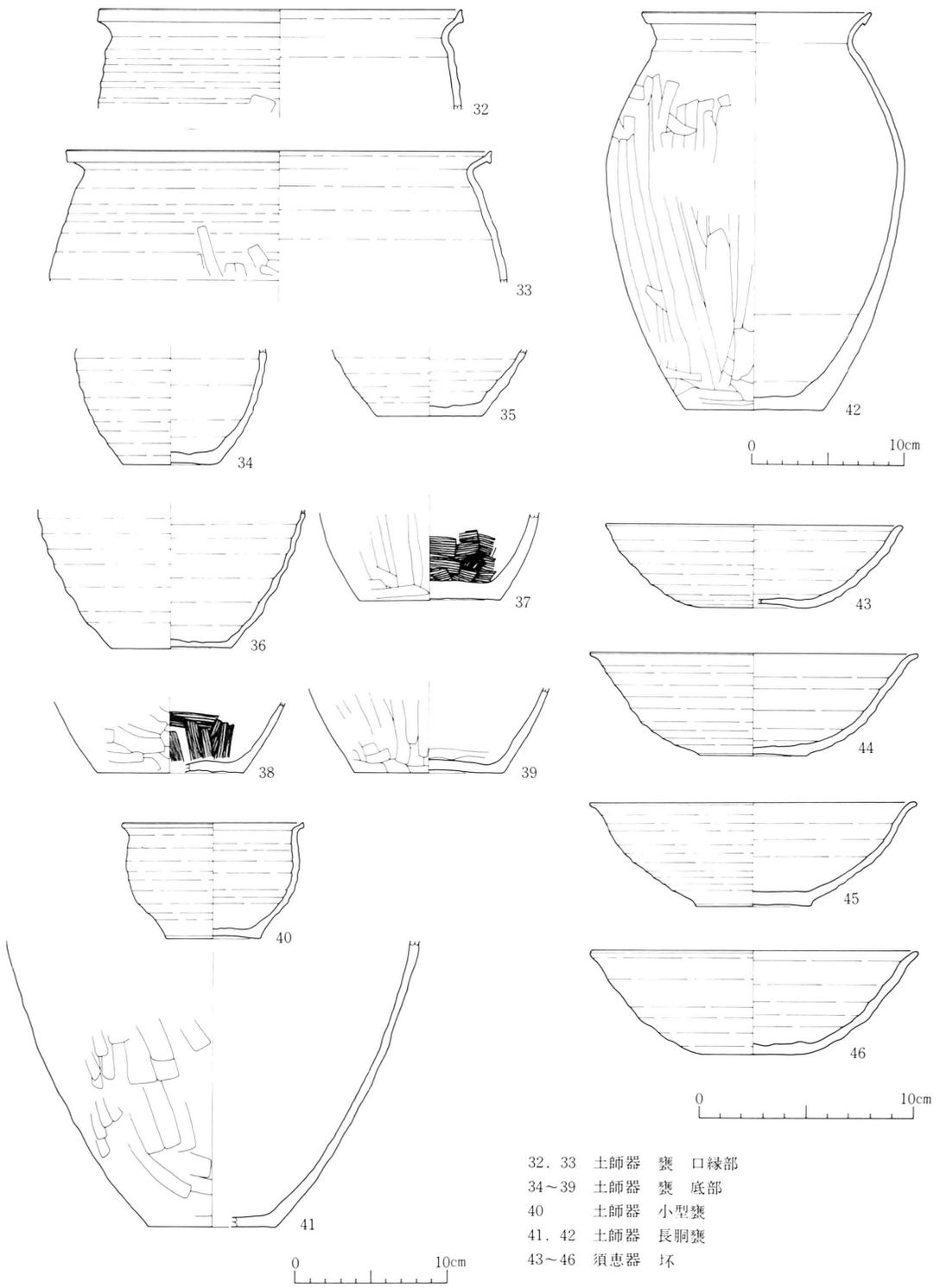
1 ~ 16 土師器杯

(第15図) C E 36住居跡出土土器実測図



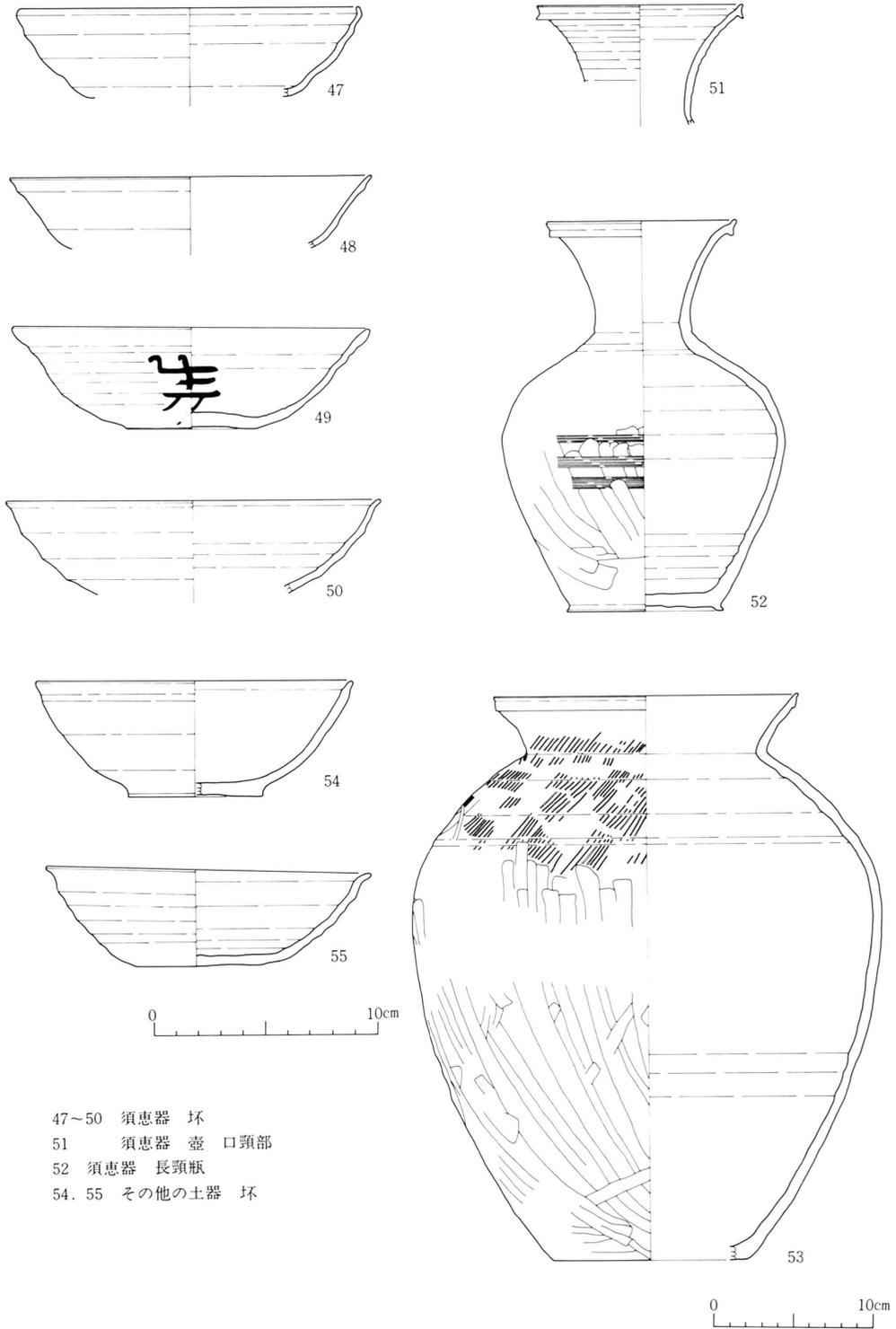
- 17~19 土師器 坏
- 20(1) 土師器 坏
- 20(2) 土師器 坏 外底部
- 21 土師器 高台付坏
- 22 土師器 高台付坏 脚部
- 23~31 土師器 甕 口縁部

(第16図) C E 36住居跡出土土器実測図



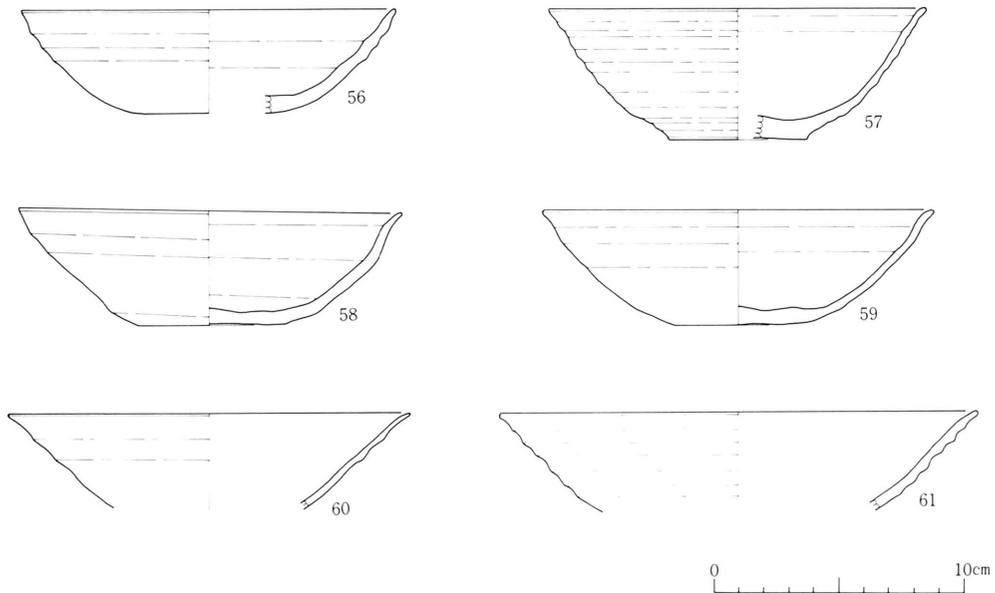
- 32. 33 土師器 襷 口縁部
- 34~39 土師器 襷 底部
- 40 土師器 小型襷
- 41. 42 土師器 長胴襷
- 43~46 須恵器 坏

(第17図) C E 36住居跡出土土器実測図



- 47~50 須恵器 坏
- 51 須恵器 壺 口頸部
- 52 須恵器 長頸瓶
- 54. 55 その他の土器 坏

(第18図) C E 36住居跡出土土器実測図



(第19図) C E 36住居跡出土土器実測図

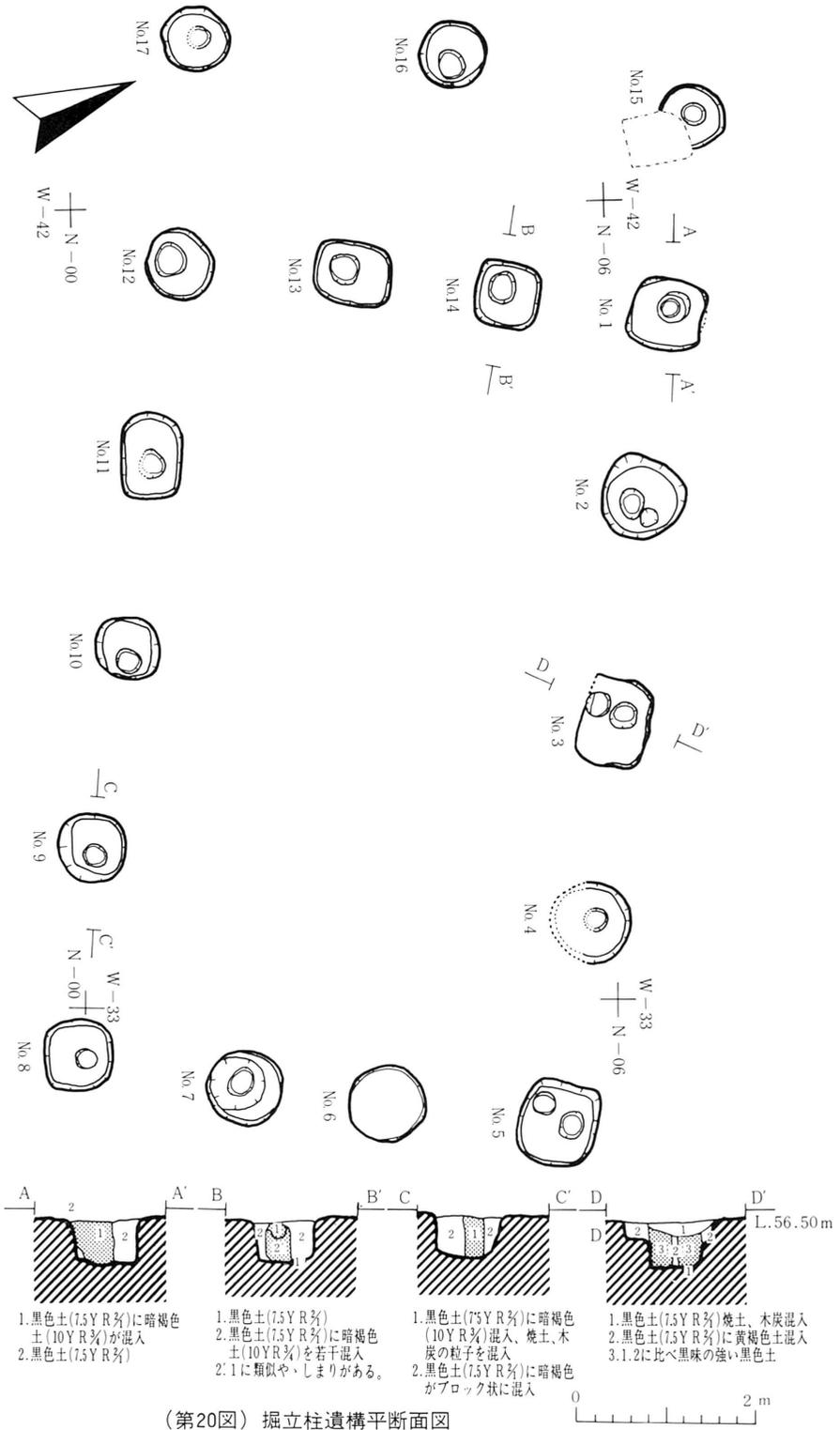
掘立柱遺構（第20図、図版4） 本遺構は、東西9.22m（宗尺の尺度で30.01尺）、南北5.56m（18.09尺）の長方形プランで、主軸方位はN-59°3'-Wである。桁行4間（間尺はすべて7.5尺）梁行3間（間尺はすべて6尺）である。柱穴は西辺のNO 15～17の掘り方は位置関係、形状、深さ等において若干のちがいが認められる。この3本の柱穴は対応関係はなく身舎に伴った庇とも考えられるが明確を期しがたい。また掘り方も円形となっている点身舎と相異なるものである。

・掘り方、柱穴の掘り方でNO 2、3、5の柱穴は夫々2本の柱穴を伴うが先後関係は判然としない。2本のうち1本は添柱的機能をもったものとも考えられる。一般に掘り方は方形を呈し、1辺0.7～1m、深さ（検出面から）50cm内外を測る。柱穴によっては明瞭に柱あたりを残した壇底に径30cm内外の柱根の痕跡をとどめるものもある。その他根石、礎板等は発見できなかった。また建物の縁を支える束柱や、溝跡などの遺構は検出できなかった。

出土遺物

遺物は土器の小破片十数片を数える。そのうち柱穴埋土内出土のものは数片の土師器と須恵器破片である。

・土師器坏（2片）内黒で口縁部から体部にかけての小片、ロクロ成形で、口縁部は横方向の



(第20図) 掘立柱遺構平面断面図

へらミガキがなされ、体部下端は放射状のへらミガキが施こされている。

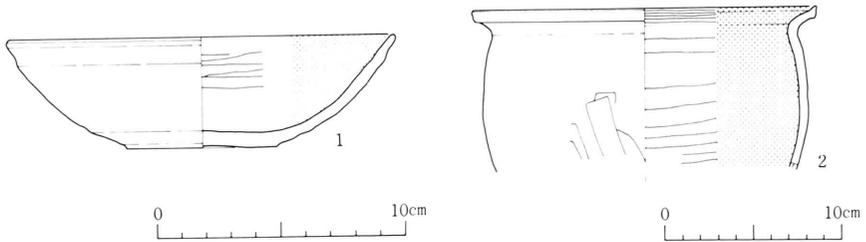
- ・土師器甕、長胴甕の体部破片である。外面に縦方向のかなり粗いへらケズリが施こされている。胎土に狭雑物（小礫、石英）を多量に含み、色調は浅黄橙色を呈し堅緻である。
- ・土師器甕、器種は不明、体部の小破片、内黒処理が認められる。胎土中に小礫を含み色調は灰白色を呈している。全般に磨滅が著しく調整痕は不明である。
- ・須恵器杯、底部破片、回転糸切り無調整、底部内面にへらナデ、指ナデの調整痕が認められる。胎土は堅緻で、色調は灰褐色を呈し硬質である。
- ・壺、小破片（3片）いずれもロクロ成形で、肩部付近の破片とみられる。外面に弧状のロクロ調整痕がはしる。内面はへらナデの痕跡のあるものもみられる。いずれも胎土は堅緻で還元炎焼成によっている。

以上柱穴遺構と出土遺物から掘立柱遺構をみる時、その時期決定となる基本資料に乏しく即断することに危惧を感じるものである。掘り込み面は第2層であり柱列に規則性があるものの遺物自体が遺構に伴うものとは云い切れず、特に遺物のあり方が流れ込み的可能性が強い。

5)〔遺構外遺物〕（第21図1・2）

土師器坏1

B D 39 黒色
土層内出土
の坏で内黒
処理が施さ
れている。



（第21図）遺構外出土遺物

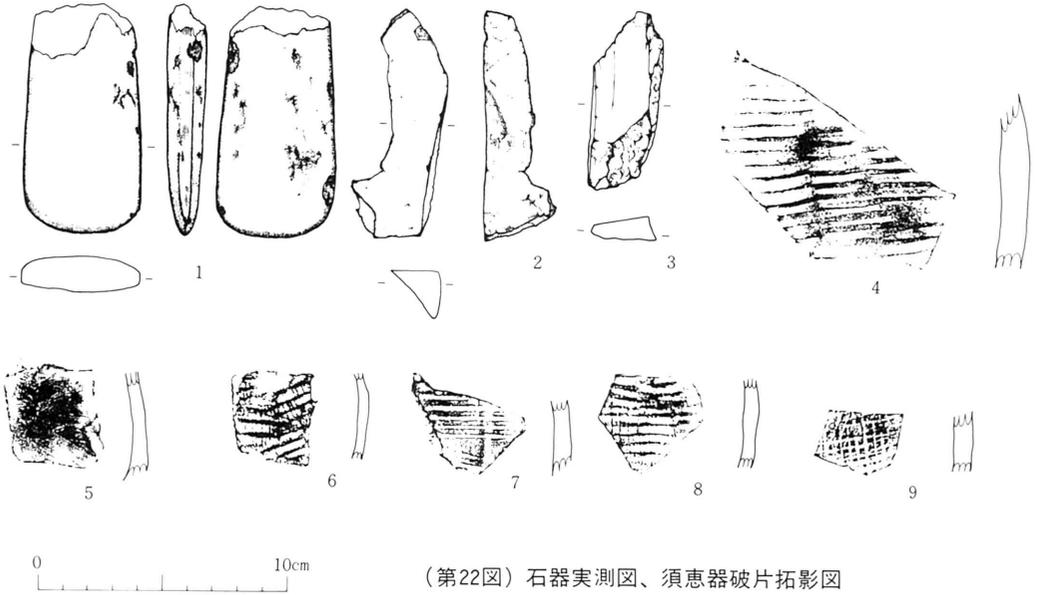
体部は丸味

をもって立ち上がり外傾する口縁部は丸味をもって終熄、調整は内面の体部中央に横方向のへらミガキがみられる。

土師器甕1 B A 36 黒色土層内出土の内黒処理がほどこされた口縁部破片である。体部外面は赤褐色を呈し胎土は良質であり、胴部中央付近にへらケズリの調整が認められる。内面は内黒で、口縁部、胴部に夫々横方向のへらミガキが入念に施こされている。

6)〔盛土内出土遺物〕（第22図）

東北本線工事の際に除去された土砂が本遺跡表土上に盛土として残されていた。この盛土内から縄文土器片、石器などを若干出土している。縄文土器はいずれも破片のみであるが、ただ1点縄文早期の尖底土器の底部が出土している。尖底先端部を欠損しているが器壁の角度から砲弾型を呈するものと考えられる。なお施文等は底部のみのため判然としない。色調は茶褐色、胎土中に石英、細砂の粒子を多量に含むものである。



(第22図) 石器実測図、須恵器破片拓影図

次に大型破片で縄文中期の大木10式(新式)の深鉢型胴部破片がある文様はすり消し縄文による曲線区画文がみられ区画文に沿って刺突が行なわれている。小破片で大木7式に比定される深鉢の口縁部が1点みられる。口縁は波状口縁で直下に横位の刺突が周りその下に二条の沈線をめぐらす。沈線の下端に隆起文が一条めぐり、隆起文に断続して押圧を加え刻文している。また胴部に二条の沈線による弧状文がみられる。他に晩期の小型土器の胴部破片があるが時期は不明である。以上はいずれも粗製土器で胎土は脆く剥落または磨滅が認められる。

石器(第22図1~3、図版13)石斧、石鋏、凹石、砥石、スクレイパー等である。石斧は磨製で2点出土しているが両者とも柄部分を欠損している。材質は中粒石質凝灰岩、砂質緑色凝灰岩である。第22図のものは刃部に無数の使用痕をとどめている。石鋏は最大長15~18cm大のもので打製である。材質は安山岩、流紋岩、濃緑色粗粒凝灰岩等を用いている。凹石は、長径10~12cmを計測する。材質は輝石安山岩で中央に敲打による凹部を明瞭に残し裏面にもわずかに痕跡が認められることから表裏いずれをも使用したものとみられる。砥石は、(第22図2・3)3点出土し、いずれも完形品はない。材質は、中粒石質凝灰岩が2点、石英安山岩が1点である。図版3のものには擦痕が二条ほどみられる。スクレイパーは3点の出土をみるがいずれも、未完成品であり刃部が明瞭とは云いがたい。材質はいずれも硬質頁岩である。以上は盛土内出土の土器、石器であるが、本遺跡に直接かかわるものではなく、おそらく遺跡西側の段丘崖または段丘上に営まれた縄文中期から晩期の遺跡に伴ったものであろうと推察される。

4. 考 察

〔1〕 出土土器

本遺跡の調査によって得られた土器は、土師器、須恵器、その他の土器で、他に鉄器、鉄滓種子などがある。この中で主体となるものは土器類である。土器は、住居跡に伴ったものとそうでないものに分られる。ここでは一応遺跡の性格及び時期決定等から遺構と共伴関係にある出土土器を中心に扱った。土器は土師器、須恵器、その他の土器の三類に区分した。

(第1表) 住居跡別出土土器一覧表

種別	器種	B G - 53住	C I - 50住	C E - 36住	計
土師器	坏	B ₂ 類 2	A ₁ 類 1 B ₂ 類 4	A ₁ 類 1 B ₁ 類 4 B ₂ 類 10	A ₁ 類 2 B ₁ 類 4 B ₂ 類 16
	甕	A 類 1 B ₁ 類 3 B ₂ 類 4	A 類 4 B ₁ 類 6 B ₂ 類 1	A 類 4 B ₁ 類 12 B ₂ 類 4	A 類 9 B ₁ 類 21 B ₂ 類 9
須恵器	坏		A 類 1	A 類 4 B 類 3	A 類 5 B 類 3
その他の土器	坏		A ₁ 類 4 A ₂ 類 3 A ₃ 類 2 B 類 2	A ₁ 類 4 A ₂ 類 1 A ₃ 類 3	A ₁ 類 8 A ₂ 類 4 A ₃ 類 5 B 類 2
計		10	28	50	88

(1) 土師器、土師器の器種は、坏、高台付坏、長胴甕、小形甕などであり、破片も含め次のように類別した。

坏、すべて成形にロクロを用い、黒色処理及び再調整を施している。ここで

は主として成形技法と調整方法をもとに分類した。

A₁類 ロクロ成形で外底部の切り離しは再調整のため不明、底部外面は手持ちヘラケズリ調整で、内外面黒色処理を行ったもの。

A₂類 ロクロ成形で外底部は回転糸切りで無調整、内外黒色処理を行ったもの。

B₁類 ロクロ成形で、外底部切り離しは回転糸切り後手持ちヘラケズリ調整を行ない、内黒処理を施したものの。

B₂類 ロクロ成形で、外底部は回転糸切り、非再調整で内黒処理したものの。

甕、完形品は少なく、口縁部及び胴部上半の破片がほとんどを占めている。したがって分類は、成形技法、口縁部、口唇部の形状及び調整等から次のように類別した。

A 類 成形は巻き上げによるが最終的には胴部上半から上はロクロ成形である。口縁部は、ゆるやかに外反し、口唇部がまるくおさまる形態を示す。調整は胴部外面及び底部をヘラケズリしたもの。

B 類 ロクロ成形で、口縁部が「く」の字状に強く外反し、口唇部が上下方向に挽き出されているもの。外底部はヘラケズリ調整か回転糸切りの切り離しのものである。なお本類は長胴甕と小形甕に分けられる。